神「転生特典は？」俺「ハーレムで！」

モテたい男

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生特典にハーレムを望んだのは良いんだが、誰一人抱けそうにないんだが……

目次

転生しました！ ―― 1
説明しました！ ―― 6
悪魔に絡まれました！ ―― 14
美少女、出会いました！ ―― 21
契約、しました！ ―― 25
メイド、来ました！ ―― 32
不死鳥と話しました！ ―― 39
愚痴、聞かされました！ ―― 45
出会い、ありました！ ―― 50
食卓囲みました！ ―― 57
教会の使者来ました！ ―― 65
決闘しました！ ―― 74
堕天使、遭遇しました！ ―― 81
宿敵見つけました！ ―― 88
神様来ました！ ―― 94
会談はじまりました！ ―― 101
襲撃者倒しました！ ―― 110

転生しました！

転生小説という言葉がある。大半が神の手違いで死んでしまった者にお詫びとしてチート能力を与え異世界に送る小説だ。

俺こと葉隠伊月も神様の手違いで死んじゃってさぁ、転生特典の一つはハーレムでお願いしてんだよ。で、結果が……

「うう～……」

「おい北斗、これは妾の林檎じゃ」

「だめよ北斗ちゃん、奈阿の専用の林檎は猛毒リンゴだもの」

「キャハハハ！」

で、ハーレム要員としてもらったのは四人の女なのですが、キャラがやばい。

まず七星北斗。この子はやばい、この子にとっての遊びでも俺は死ぬ自信があるね。

次に奈阿姫。触れたら溶け崩れる。まあ転生特典で、ハーレム要員に触れることはできますが長い時間は無理。つまりモニョモニョはできない。

コロンビーヌ。人形。そもそも出来ない。

ワルプルギスの夜。どうしろと？

つまりは俺はせっかくのハーレム要員を抱けていないのだ。うん、くそ神め。死ね。
まあいくら呪っても仕方ないことですよ。相手は神だもん。今はこの世の中を楽しみますか。
女の子と仲良くできるだけ役得だし。
「と、言うわけでデートしようぜ奈阿」
「いきなりなんじゃ?」
俺の発言に訝しむ奈阿。ムシブギョーという漫画のキャラらしいがその辺の記憶はない。
全身から常に猛毒の瘴気を放っており、毒を操りあらゆるモノを溶かす。毒を遮断する特殊な布で出来た着物を着ていたが特典の一つである複製で布を複製し頑張って現代の服装にした。
「いやー、モテない同盟の一人、イッセーが裏切って彼女作ってさ、見栄張りたいんだよ」
「下らぬ同盟だな。ふむ、しかしどうせすることもない……構わぬ」
「サンキューー!」
ふはは!今に見てろイッセーめ、確かにお前の彼女の天野ほど胸はないが顔は明らかに此方が上!目にモノを見せてくれる!あ、でも彼奴巨乳好きだから奈阿に胸がないとか言ってくるか――――

「もぁ!?」
瞬間弱めの酸性の毒が目にはいる。染みる染みる染みる！
目が完全に溶けたらどうする!?
「失礼なことを考えたろ?その罰じゃ。第一、複製すれば問題なかろう」
「そーいう問題じゃねーんだよ！」

全く昨日はグチグチとしつこかったのう。
いや、妾も流石にやりすぎたか。
「……」
「よし、次はあそこ行こうぜ！」
「む……」
全く、結局お主が一番楽しんでおるではないか。妾は手袋越しに伝わる伊月の温もりを感じながら、物足りなさを覚える。
妾は気が付けばそこにいた。それまでの記憶はない。何時だったか妾は、堀を越えやってきた三毛猫の頭を撫でたことがあった。手袋を外し、感触を知ろうとして、その猫は溶けて死んだ。

呆然とする妾に、その場にやってきた伊月はただ謝った。
妾は、妾達は伊月の願いで生まれた存在。力までは伊月も知らぬことであったが、妾がこのような力を持ってしまい、温もりを知れぬ身となってしまったのは自分の責任だと、そう泣きながら謝った。
確かに怨みもした。だが直ぐに忘れた。妾を励まそうと妾の服と同じ布で人形を作り、服を作り、耐性があるとは言え長く触れれば溶ける身で妾に触れてくれる奴を見て、その気も失せた。
まあしかし、我ながら容易い性格だ。ねっとではちょろいん?などと呼ばれる類なのだろうか?まあ、悪い気はせんがな。

いや～、楽しめた楽しめた。しかし何か忘れているような?
あ、そうだ。確かイッセーに自慢したかったんだ。でも彼奴今何処にいるか解らんしな～。
「あ、いた…」
と、そんな時彼女と歩くイッセーを見つけた。
……ま、いっか。別に女を比べる必要もないだろ。イッセーも楽しそうだし、邪

魔しちゃ悪い。帰ろ帰ろ……。
「伊月…」
「ん、どうした、奈阿?」
「あの娘、人間ではない」
「……ちょっと後をつけるか」

おっす! 俺の名前は兵藤一誠! 友達にはイッセーと呼ばれている。
あ、ありのまま今起こったことを話すぜ、俺は彼女の夕麻ちゃんとデートして、夕方公園で良い雰囲気になったと思ったらお願いがきてこれはキスか、キスなのかー!?と期待していたのだが夕麻ちゃんからきた言葉は死んでくれないかな?だった。しかもその後、光の槍を出した夕麻ちゃんが紫の霧に包まれ消えた。
「よおイッセー、無事か?」
「え?あ、うん……」
そこにやってきたのは俺の友人の1人、葉隠伊月だった。その隣には見覚えのない白髪の美少女が立っていた。

説明しました！

俺達はその後説明を求めるイッセーから逃げ出し家に戻った。

だって聞かれても俺何も知らんしね。確か天使だの悪魔だの堕天使だのがいるらしいけど詳しく聞く前にだいたい死んでるし。

「今回の奴は堕天使であろうな。どうする、伊月？」

「どうするって？」

「奴らの狙いがお主の友人だけとは限らぬ。現に我らは何度も奴らに襲われた」

ああ、そっか。俺も狙われている可能性があるんだ。

まあ俺の能力も俺だけの特殊な力だし、奈阿もワルプルギスも北斗も滅茶苦茶強いからなぁ。コロンビーヌだって強さは元より疑似体液なんてオーバーテクノロジーを持ってるし。

「……仕方ない、ワルプルギス、もっと小さくなってくれ」

「アハハハ」

ちなみにワルプルギスは大きさを変えられるらしい。元からあったかどうかは知らんが今は便利だ。流石に元の大きさじゃ家に入らないからな。

「しばらくワルプルギスと一緒にいる。それで良いか？」
「うむ。まあ、ワルプルギスがおれば大抵の者に後れを取ることはなかろう」
まあ普段逆さの状態でさえ制限されてるしな。ひっくり返れば文明を破壊する力を持っているんだ。並の相手じゃまず勝てない。いや、でも悪魔とか天使がいるならこの世界、神とかもいるんだよな？やばくね？

「おい伊月！昨日のあれ、何なんだよ!?」
登校したらイッセーがつかみかかって来やがった。やっぱり気になるのか、昨日のこと。まあ当然だよな。
「みんな夕麻ちゃんの事覚えてねーし、何がどうなってんだ!?」
覚えてない？
記憶を消してったのか？まあファンタジーな奴らだしそれぐらいできるか。たぶん、デート終了後にイッセーを殺すつもりだったんだから先に記憶を消して回ってたってとこか。俺は奈阿とデートしてたし、見つけられなかったてとこか？
「で、その夕麻ちゃんってだれだ？」
「は？いや、お前、昨日夕麻ちゃんが消えた時いたじゃねーか…」

「すまんが、覚えがない」
いや、本当に悪いなイッセー。この学園、悪魔が住んでるから目立つことは避けたいんだよ。

その後イッセーはしぶしぶ引き下がり放課後になる。なんか悪魔の1人がイッセーを迎えに来た。
まあイッセーは堕天使に狙われるぐらい何だし……ん?
此奴等、何でこのタイミングで来た?何時イッセーに堕天使に狙われるほどの何らかの力があることを知った?

どうなってんだよ、伊月も覚えてねーっていってるし、やっぱり夕麻ちゃんの事は完全に夢だったのか?
結局結論はでないまま放課後になり、何やら教室や廊下で女子達が騒ぎ始めた。
学園の王子と呼ばれている木場祐斗だ、相変わらずモテるようで。ケッ!
「や、兵藤一誠君はいるかな?」

「……俺？」
「リアス・グレモリー部長の遣いで来たんだ、付いてきてくれるかな？」
リアス・グレモリー!?駒王学園の二大お姉様の一角が何で!?
く、ここはついて行くべきなのか？グレモリー先輩に会う機会なんてそうそうないぞ……！
「おい」
「ん？」
と、不意に俺と木場の間に割り込む影があった。伊月だ。
「イッセーに近づくな」
「え？」
「……っ！嫉妬、嫉妬なの!?」
「そんなまさか、葉隠×兵藤、木場×兵藤の三角関係だというの!?」
なんか女子の皆様が不穏な会話をしてらっしゃる!?伊月も聞こえたのかげんなりしていた。うん、腐女子のネタにされるとか最悪だもんな。
「ごめんね、部長の命令だからさ」
「ならその部長に伝えとけ、天野夕麻を使ってイッセーを殺して、何をするつもりだった？てな」

「!?」
　その言葉に俺は目を見開く。天野、夕麻と言ったか？やっぱり覚えてんじゃねーか！
「おいイツ――！」
「イッセー、少し黙ってろ」
「あ、はい」
　恐！何だの今の重圧、殺されるかと思った。って、良く見りゃ木場も目を見開いてるじゃねーか。此奴も夕麻ちゃんと何かあったのか？
　が、不意に木場の目に敵意が宿る。
「……何者だ、君は」
「ちょっと絡まれやすい一般人だ。お見知りおきは結構だ」
「そうは行かない、ここは部長が治める地だからね」
「治める？ソイツは妙だな、俺はこの町で堕天使、天使を名乗る連中に狙われたことが数度あるんだぜ？てっきり、お前等も無断で侵入してお互い不干渉なのかと思ってた」
「……僕らが教会や堕天使と組んでいるとでも？」
「ああ、言うね」
　――!?
　２人の間に見えない亀裂が走った気がした。空気がビリビリ震え、教室を見れば何人

か気絶している奴までいる。
「……よそう、ここで争うのは得策じゃない。とはいえ、この町は僕らの主の領地、無断で侵入した件は、きちんと報告させてもらう」
「侵入も何も俺はこの町で人生を始めたんだが?それに、人間の世界に侵入して来てんのはてめーらだろ」

木場と伊月は数秒睨み合い、やがて木場が去っていった。そして俺達はファミレスに移動していた。
「で、どういうことだよ、朝は知らないって……」
「悪いな、本当なら目を付けられたくなかったから何だが、そうも言ってられないみたいだからな」
そして伊月が語るのは、この世界には天使、堕天使、悪魔という存在がいること。伊月自身、何度か襲われその度に少しずつ情報を手に入れたこと。
「だから俺はイッセーが狙われる理由は知らない。ただ、奴らはその異能、セイなんちゃらだな、と良くほざいてたからなぁ。多分イッセーにも宿ってんだよ」
マジか。俺にも何か力が宿ってんの?

「ちなみに俺はこれ……」
　と、伊月が言うと掌にグラスが現れる。ドリンクバー用のグラスだ。しかも、伊月が持っていたグラスに付いている僅かな傷まで同じだ。
「これが俺の第一の異能『複製』。細かい構造の理解は必要ない。一度見たもの、触れたもの、感じたものを完全に生み出せる。以前背骨が折れて内臓がグチャグチャになった時もこれで助かった。重ねるように複製すると古い方が消えるみたいでね」
　そういって伊月はグラスの一部を取り出したコンパスの針で傷を付け、手を翳す。途端に、グラスの傷が消えた。いや、傷がない状態で複製されたグラスが傷ついたグラスを消したのだろう。
「それ、俺も使えんのか？」
「力の種類は違うだろうけどな。ちなみに使い方なんて知らん」
「はぁ!?」
　知らん!?教えてもらおうと思ったのに！
　俺が若干責めるような目で見ると落ち着け落ち着けと肩をすくめる。
「じゃあイッセー、お前に鳥の羽があったとする」
「……おう」
「で、尻尾はやした俺が尻尾の使い方教えてくれっていったら、できる？」

「……ああ～」

　そうだよな、能力が違う可能性もあるんだ。その能力の使い方で俺が使えるようになるとは限らない。

「まあイッセーが力を手に入れる方法は二つあるがな」

「おお！」

「一つは地道に鍛錬」

　いや、それは面倒くさいなぁ。

「もう一つは？」

「次が、どっかの組織に所属する事だ」

悪魔に絡まれました！

「どっかの組織？」
「少なくとも狙ってくる以上力を持っていることを把握しているはず。なら、それを使わせられないなんてことはないだろ。実際下僕にすると言ってきた奴もいるし……」
　なる程、確かに俺や伊月みたいな力を持つ者を引き入れて、だけど力の使わせ方が解りませんじゃ笑い話にもならないもんな。
「ちなみにリアス・グレモリーも悪魔だ」
「マジで!?」
　つまり俺をスカウトしにきたって事か？あの最高のおっぱい様の？ぐへへ、夢が広がる。ご褒美におっぱいもませてもらえないかな？
「……イッセー、そもそも何でこのタイミングだと思ってんだ」
「へ？」
「堕天使に襲われた次の日だぞ？悪魔共の中にはまあ死んでから配下にすればよいって、断ったとたん襲ってくる奴もいた。で、堕天使に襲われた次の日に直ぐ、これでわからないか？」

「……堕天使に殺された後下僕にしようって事か？」
「だろうな。少なくとも堕天使がイッセーを狙っているのを知っていて、何もしなかった。事実昨日は殺されかけてたしな。で、このタイミング。お前が昨日殺されることが解ってたんだろ。で、無事登校してきたから思いの外強力な奴だぞ、って直接スカウトしにきたんじゃねーの？」
「……」
なる程、確かに昨日の今日で殺されかけたりスカウトされたりとかおかしいもんな。あぶねー、俺もう少しで悪魔の誘惑に乗るところだったぜ。
「……？なんか、人減ってないか？」
不意に俺は違和感を覚える。人の気配が消えている。従業員すら出て来ない。
「おいおい俺のタライ・パフェは何時くるんだよ」
と、伊月が愚痴る。タライ・パフェと言うのはガラス製の大きなタライに盛られたパフェの事である。決して1人で食える量ではない。こいつ、どういう胃袋をしてんだろ？
「むぐむぐ……お二人とも、少し良いですか？」
「え？」
そこには何時の間にか駒王学園マスコット塔城小猫ちゃんがたっていた。何やら口

をモゴモゴ動かしている。
「……おい、人払いしたみたいだけどよ……厨房にあった俺のタライ・パフェはどうした？」
「……まだ作られてませんでした。ゴックン」
「嘘だ！」
明らかに食ってる塔城ちゃんに伊月が叫ぶ。
「てめー、俺の楽しみを、よくも……それが人間のする事か!?」
「悪魔ですので」
「ああ、まさに悪魔の所業だよ……」
床に手を突き落ち込む伊月にさすがに悪いと思ったのか塔城ちゃんはオロオロしだす。と、そこへ呆れたような顔をして入ってくる者がいた。
「何やってるのよ小猫……」
「は、葉隠先輩……ほら、羊羹です」
「……まあ良いだろ。で、何かようかリアス・グレモリー」
塔城ちゃんがどっからか出した羊羹丸ごとを受け取りモチャモチャ食い始める。
「解っているでしょ？私の領地に無断の侵入、重罪よ？」
「俺は先代より許可をもらっているぞ？『人の世界に人ならざる者が住ませてもらって

いるんだから、人を追い出すなんて事はしないよ』とな。ほらこれ証拠」
伊月はそういって良く解らない文字が書かれた羊皮紙を見せる。その羊皮紙に目を通したグレモリー先輩は表情を険しくしてしかし何も言ってこなかった。本物なのだろう。
「……まあ、良いわ。それより2人とも、私の眷属にならないかしら？」
「「断る」」
俺と伊月はお互い目を合わせ頷き、同時に言う。
だってさあ、俺昨日殺されかけてんだぜ？しかもこの人達曰くこの人達の領地で。
「……悪魔になれば寿命も増えるわ。精進すれば、ハーレムだって目じゃない」
「何!?」
「おいバカイッセー」
スパン！と俺の頭上に伊月の掌が落ちてきた。
危ない危ない。流石悪魔、人を誘惑することに関して腕は一級品だな。おい、何故俺をそんな目で見るんだ伊月。
「……そう、なら私達の領地に住み着く条件として有事の際は手伝ってもらうわよ」
「何度も言わせるな。よそ者はお前等だ。この町の危機となればお前等に手を貸してやらなくもないが、お前等に従う理由なんて微塵もない。失せろ」

「……」
「……」
おおう!?また凄い殺気が。てか、伊月のカバンにくくりつけられたストラップがさっきからカタカタ震えている気が……。
「……まあ、良いわ。私の領地で勝手なことはしないでね」
「学習能力ゼロか？とっとと消えろよそ者」

駒王町にある教会の跡地。そこは現在堕天使達の潜伏先となっていた。
「レイナーレ様とはやはり連絡が付かぬか」
「まさか、やられたんスかね？」
「それこそまさかだ。あの方が人間如きに後れを取るなど……」
と、その時だった。錆び付いて開きにくくなった扉が吹き飛ぶ。
「!?何者だ！」
堕天使達は光の槍を生み出し、音を聞きつけたはぐれ悪魔祓い達が集まる。やがて砂煙が晴れ1人の少女が現れた。
赤い袴と白い着物、俗に言う巫女服を着込んだ虚ろの目の少女。桃色がかった白髪が

月光を反射させ怪しくも美しい雰囲気を醸し出す。

「異教徒か！滅びろ！」

と、はぐれ悪魔祓いの1人が祓魔弾を放つ。魔に有効であるが人間に効かないわけではない。少女の頭蓋に向けられ放たれたそれは少女の頭蓋を無慈悲に砕く……ハズだった。

少女の姿が消え、祓魔弾を撃った男の首が横に何回転もしながら吹き飛ぶ。

その背後で、床に引きずったような跡を残す少女が手を前に突きだした姿勢をゆっくり戻すのが見えた。

「――!?こいつ！」

堕天使の男が光の槍を放とうとするが少女の両手が胸を貫き、そのまま二つに裂かれる。

ボタボタと零れ落ちる内臓や血に身を汚された少女は周囲を見渡し、笑う。

「……お前、達……敵だ。イツキの敵……これの敵だ」

「「――――――！」」

少女が地面を蹴り砕き高速で迫る。それが堕天使達が見た最期の景色であった。

「ただいま～」
「お帰りなさぁい、何もなかった？」
「面倒な奴らに目を付けられた」
　コロンビーヌの言葉にため息を付きながら答える俺。本当に面倒な奴らだよ。今日は疲れた。さっさと風呂入って飯食って寝るか。
「……」
「……う？」
　脱衣所を空けると生まれたままの姿の北斗がいた。
「……一緒に、入る？」
「あ、うん……」
　断っても無理やり入れられるんだろうなぁ。てか何で血塗れなんだろ？またはぐれ悪魔とか言う奴でも狩りに言ったのか？

美少女、出会いました！

俺は伊月と修業することにした。今後ああいう奴らが絡んできた時に戦えないときついからな。

やり方は簡単。ひたすら組み手。

ワルプルギスに張ってもらった結界の中でとにかく闘う。本来ワルプルギスには結界で身を隠す必要なんてないらしいけど張れない訳でもないそうだ。そしてワルプルギスの結界はもはや世界と言っても過言ではない広さを持っていた。

「霊気？」

「そ、俺は同居人達のモデルになった存在の近しい者の記録を特典で見ることが出来てね、その力の一つに霊気（ルン）ってのがあったんだ」

いわゆる漫画の気とか霊力。本来は座壇という触媒を用いて仏の奇跡を起こすらしい。北斗ちゃんの敵である者達の力だそうだ。

詳しいことは解らないけど伊月の同居人達はみんな異世界に本物がいて、そのコピー何だとか。みんな強いっての何の。俺達は一度も勝ったことがない。

『なるほど、気か。確かに相棒は覚えた方がいいな』

「……ドライグ」

不意に俺の左手から声が聞こえる。俺の神器（セイクリッド・ギア）というらしい力の中に宿るドラゴンだ。取り敢えず思いつく限りの力の出し方を試している時、ドラゴン波で出た。

能力は力の倍化。十秒毎に力を倍化させるそうだ。で、鍛錬し続けたらある日ドライグの意志が話しかけてきた。

ちなみにドライグ曰く北斗ちゃんやコロンビーヌちゃんはともかくワルプルギスや奈阿さんにはどれだけ倍化しても勝てないそうだ。

「で、その霊気はどうやって覚えるんだ？」

「こいつを使う。神丹酒（ソーマ）だ」

何でも体内の霊気を活性化させ身体能力を底上げするドーピング剤何だとか。無理矢理行うわけだから副作用は強いが感覚を覚え自分で行えるようになればそこまで気にする必要がなくなるらしい。

「なあドライグ、俺って弱いか？」

『弱いな』

ハッキリ言いやがるなこいつ。まあでも確かになぁ。この中じゃ最弱って言う伊月にすら傷一つ負わせることができないんだから。

『そうふてくされるな相棒。確かに彼奴は本気を出してないが』
「……マジ？」
『彼奴の手をみたか？ボロボロだったろ？あれは剣を振り続けた者の手だ』
「ふーん。ん？でもうちの剣道部の連中、あんな手の奴いなかったぞ？」
確かに伊月の手はかなりボロボロだ。けど剣ダコと言うなら剣道部の連中にだってあるはずだろう。多少ボロボロだけど彼処までじゃなかった気がする。この前の木場なんて普通に綺麗な手をしていた。
『振ってきた回数が違う。練度が違う。くく、戦国の兵に転移したこともあったが、奴並だぞ彼奴は』
つまり血で血を洗う時代の猛者並みに鍛えてんのね。そりゃ、数日の俺じゃ勝てんわ。まあ、何時か絶対勝ってやるけどな！ん？
『その意気だ相棒……どうした？』
ふと前を見れば金髪の少女がぶっ倒れていた。道端で。
「お、おい！しっかりしろ！」
「……」
俺が慌てて駆け寄り抱き起こすと少女はゆっくり翡翠の瞳を開く。すげー美少女だ。
そして、美少女はゆっくり口を開く。

「……い……」
「い？」
「イキダオレタ……」
「……はい？」

契約、しました！

「ふむふむなる程……」

俺はイッセーが拾ってきた少女、アーシア・アルジェントと話す。聞けば彼女はここの教会に新たに派遣されたそうだが教会が見つからず3日ほどさまよっている内に行き倒れイッセーに保護されたらしい。

「ニホンコ、オボエテキタ……ガンバった……でも、伊月さんは私の言葉が解るんですね」

「何処の国の言葉もバッチリだ。コロンビーヌは知識人だからな」

チラリとコロンビーヌを見ると恋愛小説から目を上げ片手を振ってきた。

「モグモグ……厚かましいかもしれませんが。んぐ、教会の場所をハグハグ、教えてくれませんか？」

よっぽどお腹が空いていたのか食べながら会話するアーシア。

「ゴクゴクゴク……プヒャ。ふう、御馳走様でした。日本にはこんなにおいしいパンがあるのですね」

牛乳を飲み終えアーシアは笑顔を向けてくる。

しかし教会に派遣、ねぇ。北斗が血塗れで帰ってきた日、少し町を散策してみたら教会で大量の死体を見つけた。十中八九北斗の仕業だ。
死体の中に堕天使の羽が数枚残ってたし、多分堕天使の派閥だったんだろう。
「アーシアって堕天使側の人間なのか?」
「……え?」
俺の指摘にポカンと固まるアーシア。が、すぐに納得したように頷く。
「はい。イツキさんも、でしょうか?」
「違うけど?」
「?だって、ここは堕天使様の領地なんじゃ……」
「ここは悪魔の領地だけど?」
「……」
アーシアは目を丸くして固まってる。なんか面白いなこの子。しかしまるで時が止まっているかのようだ。マジックで額に肉を書きたくなってくる。まあ、やらないけど。
「え?え?だって、三勢力は不干渉では?」
「そうなの?詳しくは知らんけど、悪魔の領地扱いされてるのは間違いない。アーシアが普通に出歩いたら侵入者めー、眷属にならないなら殺してやるーってなるぞ?」

「ふえええええ!?」

涙目になり怯えるアーシア。何これ可愛い。

「しかも殺された後無理矢理悪魔にされて、逃げ出したら犯罪者として処刑されるんだ」

「ひぃぃ！」

「いや、殺されるだけじゃすまないかもな。殺したふりをしてアーシアを閉じ込めて■■■■■■が□□□で○○○を▲▲▲▲して○○☒☒☒◆●○○○」

「ぴぃぃぃぃ!?」

「さらに――――あいた!?」

ズゴン！と銀色のトンカチが俺の頭を叩く。これは、コロンビーヌか。チラリと見るとコロンビーヌは大きな瞳をジト目にして俺を睨んでいた。

「あんまり女の子をいじめちゃだめよん」

「すまん、アーシア。言い過ぎた」

「で、ですよね……そんな、怖いこと……」

「まあ全く嘘ではないわよねぇ」

「ぴえぇぇぇん！」

「……おい」

今度は俺がコロンビーヌを睨む番だ。コロンビーヌはんべ、と舌を出して悪戯っぽく

ほほえんだ。
「よしよしアーシア、ごめんなー。大丈夫大丈夫」
抱きしめ頭を撫でながらポンポン背中を叩いてやるとアーシアはヒクッヒクッとしゃっくりのような音を出しながら泣きやむ。
「うう、悪魔にだって良い人はいるんでしょうが、その話を聞くと悪魔になりたくありません……」
え、マジ?今の話聞いても悪魔にだって良い人はいるとか言えちゃうの?聖人かよこの子。何で堕天使の勢力にいるんだよ。
「まあ取り敢えず、うちにすむか?」
「へ?」
「前任者との契約もあるし向こうも俺の加護下の人間にゃ強く出れないはずだからな」
たぶん。大丈夫だよな?流石にそんな馬鹿な真似しないよな?
悪魔が前任者と交わしたとは言えれっきとした契約を破ったりしないよな?念のためまた契約しとくか?いやしかし、前回の契約は双方損なしだけどグレモリーじゃなぁ、一方的な契約してきそうだし。
あ、でも確かもう一つ悪魔のチームがあったな。そっちに頼んでみるか?少し話してみた感じ、真面目そうだし。

まあ悪魔としてはどうか知らんが、契約書で呼び出せば向こうも偉そうにはしないだろ。つーかしてる奴いたら仕事大丈夫か心配したくなるな。

「というわけで召喚」

早速町で配られているチラシを広げある悪魔の顔を思い浮かべる。ん？別の奴が出て来そうだな。しかしなめるなよ？俺の持つ知識の中には縁関知もある。

それを使い、転移に霊気を流し術式に割り込む。

「……え？」

「おや？」

風呂だと思ったか？残念、エプロンだ。クッキーの乗った盆を持ってた。うちの生徒会長支取蒼那だ。

「……私は今日、休みの筈なんですが」

「すまんね、どうしてもリアス・グレモリーと同格の相手がほしくてな。同格だよな？」

「まあ……一応親友ですが」

「不安になってきた」

彼奴の親友とか不安すぎるんだが。

「……あの、確かにリアスは人間を見下さないとは口ばかりですし、眷属の殆どが眷属にならなければ死ぬ状況で眷属にしましたけど、というか1人は死にたくないと言った

だけで、1人に至っては死んでる間に悪魔にして同意すら取ってませんけど……悪い子じゃないです、嫌わないでもらえないでしょうか?ほんと、悪いのは頭なので」
「……お前親友何だよな?」
「はい。ずっと近くで見てました」
「……」
「それで、ひょっとして眷属の勧誘がしつこいとかですか?でしたら私から……」
　申し訳無さそうに言ってくる支取。うん、良い子だ。本当にグレモリーと親友なのか?
「まあ眷属の勧誘は一応何度かあるけど、今回はそっちじゃない。アーシア」
「だ、大丈夫ですか?眷属にされてその……口にするのも恐ろしいことをされたりしません?」
　アーシアは怯えた様子で扉の影から顔をのぞかせる。誰だよアーシアをここまで怯えさせた奴。俺だけどね。
　どう励ましそうかと悩んでいるとアーシアは震えながらも支取の下まで歩く。
「あ、アーシア・アルジェントです、よろひくお願いしましゅ!」
「は、はいよろしくお願いします。教会のシスター、でしょうか?」
「あ、あの。私、悪魔の男性を癒してしまい教会から追い出されたんです。それで堕天使

様に保護されるためこの町に来たんですけどここは悪魔さんの領地で途方に暮れてたんです」
「そういえば、堕天使が侵入してましたね。リアスが私が対応するから、と言ってましたが……」
「その堕天使達ならはぐれ悪魔祓い共々棺の材料になってもらった」
「棺？」
　詳しいことは企業秘密で。後で北斗に与える以外使い道今のところないから教える必要もないしな。
「まあ事情は解りました。堕天使と連絡を取りたいのですね？少し時間はかかりますが……」
「いや、アーシアは俺が保護した。そこでリアス・グレモリーから守ってほしくてな」
「……確かに、あのリアスなら……あのリアスなら悪魔を癒せる人材を放っておかないでしょうからね。解りました、では契約しましょう。対価は……今は判定機もないですし、自己判断でよろしいですか？そうですね、味見役なんてどうです？」
　本当に、良い奴だな。
「じゃあさっそく――――」
　この日、俺は口の中にも地獄が存在できることを知った。

メイド、来ました！

ソーナ（名前で呼んで良いと言われた）との契約でリアス・グレモリーには完全に俺達に不干渉を徹底してもらい、ついでにアーシアも駒王学園に通えるようになった。

アーシアも同世代の初めての友達ができたと喜んでいた。

修行も、イッセーがクラスメートに良いところを見せたいのかやる気を倍増させていた。現金な奴だがまあやる気があるのは良いことだ。

俺は岩を３つほど貫いた棒で素振りをする。イッセーはコロンビーヌに遊ばれていた。

とまあ、そんな修行を続けているわけだから夜はとても疲れるわけだ。一緒に寝たがる北斗に俺を鯖折りしないように何度もしつこくお願いし、さぁ寝ようとした時だ。

「伊月、命令よ。私を抱きなさい」

「……はぁ、相当疲れてるみたいだな俺」

肉体関係になるほどフラグをたてた覚えはないし、そもそも俺たちはキチンと不干渉の契約を結んでいるはずだ。それに下の名で呼び捨てにされるほど親しくなった覚えもない。

幻覚だな。
「よし、寝るか北斗」
「ん……」
「ちょっと聞いているの!?もう、仕方ないわ……イッセーの方に……」
「北斗、ぶち殺せ」
いきなり何抜かしてやがんだこのアマ！そうか、責任をとらせて眷属にしたいんだな、よし殺す。
とっさに北斗に命令してしまったがすぐに頭を複製して何度も心臓や眼球を複製させながら苦しめて殺してやる。が、北斗の拳はグレモリーの命を刈り取る事はなかった。
「――――っ！」
銀髪のメイドが北斗の拳を受け止めていたからだ。悪魔や堕天使、天使とかの気配がないから簡単に止められると思ったのか、現れてとった行動が片手を突き出すだけだった。ありゃ掌の骨完全に砕け散ってるな。
「これは……何の真似でしょうか？」
「勝手に不干渉の契約をしたはずのうちに入って来るもんだから、とうとう殺した後に眷属にしてくるのかと思ってね」

「うううう！」
　俺の言葉にメイドが目つきを鋭くすると北斗がうなりメイドを睨む。まさに一触即発。
「それはグレモリー家を敵に回すと？」
「敵に回すんじゃなく、敵に回られた、だ。加害者と被害者は言い方一つで印象が変わる。気をつけろ」
「……」
「がううう……」
　北斗がギシッと床につけた足に力を込める。メイドも何やら魔力を迸らせる。が、ここまでにしておこう。流石に悪魔全てを敵に回すのは面倒だ。いや、正確には回られるだけど。
「よしよし北斗、落ち着け。ほら良い子良い子…」
「うぅん♪」
　頭をなでてやると北斗は気持ちよさそうに目を細めすり寄ってくる。
「ちょ、ま、待て北斗！抱きつくな、折れる、背骨が折れて内臓が潰れる……！」
　あ、彼奴等何時の間にかいなくなってるし！クソが！取り敢えず北斗に離れてもらった後塩撒いとこ。

そして次の日、木場祐斗が俺とイッセーを呼びに来た。昨日の今日でか。俺達は不干渉、有事じゃなけりゃ動かないと伝えたはずだが？

「今がその有事なんだよ。説明したいから、付いてきてくれるかな？」

……まあ、なら良いだろう。昨日のグレモリーの妙な行動もその有事に関係しているというなら情状酌量の余地もあるしな。

念のため誰か呼ぶか。俺は旧校舎に入ると同時に召喚魔法を発動する。ワルプルギスはアーシアが眷属にされないように護衛させてるから、残りの三人のうち一番暇な奴が来るはずだが……。

「呼ばれて飛びでてこんにちはぁ」

コロンビーヌが来た。悪魔と争う気はないし、無力化するという意味で此奴以上の適任もまずいないしラッキーだな。

「……彼女は？」

と、木場が警戒したように言う。

「俺の仲間だよ。俺はお前らグレモリー眷属を微塵たりとも信用してないからな。俺よりつよーい護衛をつけるのは当然だろ？」

そしてグレモリー眷属達の巣窟であるオカルト研究部にはいると昨日のメイドがいた。

「……お嬢様、昨日と良い、彼等は何者ですか？」

「私の眷属候補達よ」

「おい、何度断らせれば気が済むんだ。三歩歩いたら頭の中リセットでもされてんのか？」

「ま、まあまあ落ち着けよ伊月……悪気はないと思うぞ？タチは悪いけど」

イッセーも言うようになったな。まあ、ソーナと契約するまで何度も勧誘してきたからな。あまりにムカついたんで何度殺してやろうかと思ったか。しかも最近でも勧誘のチラシを送ってくる。

「しかし無断で居住させるのは……」

「俺等のご先祖様はてめーらが寄生してくる前からこの世界で猿から頑張って進化して来てんだよ、余所者にとやかく言われたくねぇ」

「……失礼しました。確認ですが、どこかの組織に所属していたりは――」

「してない」

「であるならば何の問題もございません」

グレモリーが何か言いたげだが、ざまぁｗｗｗ
「じゃあそろそろ俺等が呼ばれた理由を教えろよ、この町の有事ってなんだ？」
「……有事？」
俺の言葉にメイドは不思議そうな顔をする。どうした？
「一大事よ。下手したら、私はこの地から離れてソーナが後を任されることになってしまうの」
「よっし！」
「しゃあ！」
「……？」
俺とイッセーがハイタッチし、コロンビーヌは首を傾げていたがハイタッチに参加してくれた。
「……」
グレモリーが眉間をピクピク動かしているが気にしない気にしない。
「私は、結婚するのよ」
「よしお祝いしてやろうぜ！寿退社おめでとー！」
「これで、これで父さんと母さんになま暖かい目でノートとかは隠しとけよと言われなくてすむ！」

ああ、両親に勧誘の書類見られて中二病扱いされたのか。

かわいそうに。と、その時部屋の床に描かれていた魔法陣が光り、炎が吹き出してくる。

「コロンビーヌ」

「はぁい」

コロンビーヌが指をパチンと鳴らすと銀色の蓋が魔法陣に被さる。ゴン！と音がして盛り上がったので押し返しておく。

「ぷふ！も、申し訳ありません。その方が出て来なければ話ができないのですが…」

困ったように言うメイドだが今絶対笑ってたよな？

不死鳥と話しました！

魔法陣から距離を取り銀の蓋を消させる。すると再び炎が溢れ出してきた。やり直すのかよ、暇なのか？

そして炎を片手でなぎ吹き飛ばす。炎を出した意味は？

「ふう、人間界は久しぶりだ」

「すごいな、彼奴……」

「ああ、凄いな」

「そうねえ」

「ん？くく……」

俺とイッセー、コロンビーヌの発言に髪をかき上げどや顔をする男。

「さっきのことを完全になかったことにしてるぞ」

「思い切っりぶつけてたのにな」

「喜劇役者に向いてそうね」

「貴様等ぁ！馬鹿にするのも大概にしろ、いやそもそも何でこの場に人間がいる！」

「私の――」

「そこの女悪魔の寝言につき合わされたんだよ」
　もう帰って良いかと言外にグレモリーを見るのだが睨まれた。ふざけんなよ、俺等関係ないだろ。
「?まあ良い、俺はライザー・フェニックス、本来なら人間界の空気など耐えられないのだがわざわざ出向いてやり、こうしてお目通りかなえたことを末代までの誉れにすると良い」
「そうか、帰って良いか?」
「ふ。幸運をとことん理解できない奴だな。ああ、いい。いけいけ……」
　シッシッと手を振るライザー。ムカつくがちょうど良い、出て行こうとする俺達だが、グレモリーが声をかけてきた。
「ちょっと、勝手にどこに行くつもり?有事の際は協力する契約を破る気?」
「……」
　どこが有事なんだ?まあ此奴にとってはそうかもしれないが俺等にとってはそうじゃない。あれか?組織として抗議できない俺等をパシリか何かと勘違いしてんのか?
「お嬢様、今回の件はお嬢様にとっての有事ではあるんでしょうが、個人的な有事も契約内なのですか?」

「この町に関してだけだ」
「では、関係ないのにお呼びだてしてしまい申し訳ありませんでした」
許可もでたしさあ帰ろ。と、したのに今度は別の奴が呼び止めてきた。
「まあ待て、そんなに急ぐこともないだろ?」
ライザーだ。何のようだ畜生め。
「話によるとリアスの眷属候補らしいが、何、強いの?」
「イッセーは俺より弱くて俺はコロンビーヌより弱い。で、コロンビーヌは北斗より弱くて北斗は奈阿より、奈阿はワルプルギスより弱いな」
「はは!女より弱いとかマジでか?あ、いやうん。そうだな、人間なら仕方ないか。強い女ってのはたくさんいるからな、俺の眷属達みたいな……」
ライザーが指をパチンと鳴らすと十数名の美人美少女達が現れた。どいつもこいつも平均並以上には整った容姿、なるほど見た目で集めてるのか。
隣でイッセーが大号泣してる。そういや此奴、ハーレムに憧れてたんだっけ?
「良いかイッセー、良く聞け」
「……伊月?」
「確かに俺も、昔はお前のようにハーレムに憧れた。神に願いもした。けどな、女一人一人に人格があり、性格があり、個性がある。女は決して俺達男の価値を高める道具じゃ

ないんだ。そこを履き違えて女を物にするな……彼奴等の目を見て見ろ、全員……金髪ドリルを除いた全員が心の底からライザーって奴を慕ってる。一人一人、ちゃんと女として、1人の存在として扱っている証拠だ。つまりだ、ただやりたいがためにハーレム作りたがってる今のお前には睨む権利なんてない」

「…ぬぐ……っ！」

イッセーが言葉を詰まらせライザーのハーレム要員達が解っているじゃないかと頷き金髪ドリルがふん、と鼻を鳴らし何故かグレモリーが詐欺師を見る目で睨んできた。

「確かにねぇ。たくさんの女に囲まれたいなんて、傲慢よ。でも、たくさんの女の1人でも良いと女に思わせる男ならハーレムを作っていいんじゃないかしら？そこに「愛」があるならね♪」

ケラケラ楽しそうに笑うコロンビーヌ。

「……まあ、彼奴も三分の一ぐらいは道具としてみている節があるが」

なにせイッセーがハーレムを作りたがってるの聞いて明らかに勝ち誇った笑み浮かべてたもん。

まあちゃんと慕われるぐらいには優しくしているみたいだけど。つーか此奴、権力と容姿をモテただけのイッセーと同じスケベな気がするんだよな。

「ははは！面白い奴らだなお前等、名前は？」

「名無しの権兵衛」
「なる程名無しの……おいお前伊月とか呼ばれてたろ!?」
「ああ、葉隠伊月だ」
「よし伊月、未だ女より弱いとは言えリアスに勝手であろうと眷属候補扱いされるのだ、才能はあるのだろう。妹の眷属にならないか?」
「今のところ悪魔になる気はねーよ」
「そう言うな、まずはお互い良く知ってから……」
「お兄さま! 何を勝手に!?」
「まあ待てレイヴェル、彼奴も俺の次ぐらいにはいい男だし、お前のこともキチンと1人の悪魔としてみてくれるぞ? 貴族だのフェニックス家だのという事を気にしない者が欲しいと言ってたではないか」
「それとこれとは!」
　と、その時メイドがコホンと咳をする。
「申し訳ありません。今回はレイヴェル様の眷属探しではなくお嬢様とライザー様の婚約について話をしたいので、その件はまた後日にでも」
「だとよ。じゃ、俺はもう行くな。話はきちんと玄関から菓子折り持ってやってきた場合に限って聞いてやるよ」

１０日後。ライザーが冥界の菓子折りを持ってやってきた。律儀な奴。
「……魔王様に婚約破棄を言い渡されたんだが、どうすればいいと思う？」
「……取り敢えず抗議でもしてみたら？」

愚痴、聞かされました！

「で、婚約破棄になった理由は？あ、アーシア、こいつにジンジャー一つ」
「は、はい！」
伊月の家で俺はライザー・フェニックスの愚痴を聞くことにする。酒は飲めないのでジンジャーエールで我慢してくれ。
まあ、人間界の飲み物を飲んだことがないのか絶賛だったけどな。伊月はコーラを飲んでいた。
「貴族の家の持つ特性みる限り、断られる理由がわからねーな」
「そうなのか？」
伊月の発言に聞き返すと伊月はどこからともなく取り出したホワイトボードにグレモリー家、バアル家、フェニックス家と書きそれぞれの下に高い魔力、滅びの力、不死（肉体変質）と書く。
「ライザー、これに間違いは？」
「ない」
「よし。まずだ、リアス・グレモリーはバアルとグレモリーの特性を受け継ぎ高い魔力と

滅びの力を持っている。これは十分先が期待できるな。力だけなら」
　力だけなのか。うん、まあ、解る気はするけどさ。
「次にフェニックス家の不死のあり方だけど、これは不死とはちょっと違う気がするんだよな。光とかには弱いんだろ？だから、体を炎に、フェニックス家が持つ魔力に変質させて不定形故に欠損部位を復元できると考えるべきだ」
　ふむふむと頷く俺とライザー。何時の間にかアーシアも混じっていた。
「で、高い魔力と滅びの力に肉体を魔力の塊に変質させるフェニックスの力を取り入れたら？」
「……滅びの魔力の塊になれる悪魔が生まれる？」
「もちろん多少は異なるだろうけど、例えば斬られた瞬間そこが滅びの魔力の塊になって傷を直すと同時に剣を消滅させる、なんて事もできるかもしれないし、光に傷つけられても体に回る前に消滅させる事ができるかもしれない」
「……滅茶苦茶強いじゃないか俺とリアスの仮想子供」
　ライザーが子供の得るかも能力を見て引きつる。
「うーん、フェニックス家て一度は婚約者になってんだからふさわしい家柄って事だろ？悪魔の未来を考えるならその子孫も強そうだし、何で断られたんだ？」
「ああ、あのままリアスと俺で話し合いが平行線になってな、レーティングゲーム……

眷属を持つ悪魔達の間で執り行われるゲームをして、俺が勝ったんだが眷属撃破数で負けててな……」
「あるいは赤龍帝でも混じってりゃ善戦した、なんて評価はされなかったかもな。くそ、俺等も協力してわざと負ければよかった！」
悔しそうに言う伊月。確かにな、これでグレモリー先輩が残るのは確定だもんな。
「まあ婚約破棄だけなら、俺も別にいいんだがな……家に迷惑をかけてしまった」
「ああ、婚約を断られるってそれだけで家の名に傷つけるもんな。漫画の知識だけど」
「いっそ責めてくれたら楽なんだが、兄貴も親父もオフクロも何もいってこない。俺達フェニックスを成り上がりと呼ぶ奴らはここぞとばかりに責めてくるがな」
聞けばフェニックス家は伊月の説明にあったとおり体を炎、つまり形の決まっていない気体に変えられる特性による不死で、それ故光を食らえば危ないらしく、回復アイテムづくりのため後方にいたらしい。
その回復アイテムだって楽に作れる訳じゃないのに貴族達からは良く思われていないらしく、特に悪魔同士の戦いであるレーティングゲームが始まってからはネチネチ言われているらしい。
「大変だな、お前も」
「ここは良い。俺の事をフェニックス家のライザーとして見る者はいないからな……」

本当、家の柵とか面倒なんだな。めっちゃ疲れてる。ああ、だからこの前妹に伊月薦めてたのか。

「酒が出せなくて悪いな。俺等未成年なんで……」

「こちらこそ愚痴を聞かせて悪いな。人間界の飲み物もなかなかの味だ、気にするな」

そして去り際、また（ジュース）飲みに来て良いか聞いてきたライザーに鍛錬相手として眷属を連れてきてくれることを条件に伊月が了承した。まあ確かに、皆俺より強いからどれくらい強くなってるのか解らないんだよな。

奈阿は食材の詰まった袋を持ちながら路地を歩く。日は傾いてきたとは言え、まだ街灯が付かないほどには明るいというのに人の気配が存在しない。

「……して、妾に何用じゃ？」

「あらら、バレてました～？」

ケラケラ笑いながら現れたのは白髪の少年。服装は神父服だ。教会、あるいは堕天使の関係者なのだろう。

「もしやアーシアの知り合いか？」

「は？アーシア……？ああ、あの悪魔癒やしたっつうくそビッチの名前じゃあーりませ

んか！何、あいつ生きてたんだ？てっきりあの激ヤバ巫女に町うろついてんの見つかってコロコロされてるかと思ったわ！」

「……」

少年の口から出たアーシアの侮辱と、激ヤバ巫女という単語に奈阿は目を細める。激ヤバ……おそらく激しくヤバいという意味なのだろう。そして巫女、心当たりが1人いた。

「まあその巫女にい？ニューフリード君がリベンジマッチに来たわけですよ。けど場所が解らねー！そんな時現れた明らかに人間じゃない何か、これはもう運命だねー、必然だねー」

少年はそう言って殺気を放ちながら剣を取り出し奈阿に向けてきた。

「剣道部ごっこやろうぜ！俺部員、お前殴れる的役な！」

シュン！と人間では反応できない速度で動いた少年。一秒にも満たない時間で奈阿の背後に移動し剣を振り下ろし……ジュワァ！と音を立て剣が跡形もなく溶けた。

「……マジですか」

「なる程、敵か。死ぬがよい」

呆然とする少年、奈阿の言葉に新たな剣と光の剣を取り出すが紫の霧に包まれこの世から溶け消えた。

出会い、ありました！

「土産じゃ」

奈阿がそう言って持ってきたのは歪な形の鉄屑と剣の柄。聞けば突然襲ってきた神父を溶かした際、剣が微妙に残っていたので防御の際完全に刃を溶かしてしまった剣と一緒に持ってきたらしい。

「本気ではなかったとは言え、妾の毒に耐えたのじゃ。伊月はそういう珍しく強い物が好きじゃろ？」

「まあな……でも、これは完全に駄目になってるな」

複製の能力の福次効果なのか、俺は見たモノをある程度解析できる。これはまあ、うん……本来はそこそこの業物なんじゃないかな？家じゃ規格外ばかりだから麻痺してるけど多分すごい武器だと思う。

けどもう駄目だな。片方の柄はそもそも飾りだしもう片方は溶けた刃が残っているけど剣の力の核となる部分が完全に溶けて効果を失ってる。ただの鉄屑だこれ。

「ん～……溶けててわかりにくいけど、何だこの核、荒いな」

例えるなら出来もしない物を必死に作ろうとして出来なかったみたいな？無理やり

力を与えようとして粗が目立つ。結局諦めて核にしたってとこか？
「気に入らなかったか？」
「いや、嬉しいよ。ありがとう」
「……妾は嘘は嫌いじゃ」
「正直無事だったとしてもいらなかったかな」
「……そうか。妾も少し、物を見る目があれば良かったんじゃがな」
「いや、気持ちだけ十分だよ」
「……そうか」

俺ことイッセーは公園で鍛錬をしていた。ライザーの配下の1人、イザベラという悪魔との格闘訓練だ。
伊月は俺より強いので鍛錬にならないとライザーから暇な奴を貸してもらっている。最初は兵士だったけど、相手にならなかったので今では戦車のイザベラが相手になってくれている。
「ふっ！」
「――っ！はぁ！」

イザベラの鞭のようにしなる蹴りを腕で受け止める。ビリビリと腕が痺れ足が浮きかけるが踏ん張りそのまま足をつかみ引き寄せる。
「せや！」
「く！」
引き寄せる勢いと俺自身の拳の力を上乗せしたパンチにはイザベラも顔をしかめたが体を回転させ足に捕まっていた俺を宙に放り投げる。ヤバい！拳が来る！
『Ｂｏｏｓｔ!!』
「――――！」
俺の力が底上げされ、反応速度の上昇に俺にあわせてくれていたイザベラの拳の速度が落ちたように錯覚する。
ギリギリ体を回転させ頬を擦る拳を掴み取り回転を利用して着地と同時にイザベラを投げる。が、馴れない動きをしたからバランスを崩しその場に倒れてしまう。
「……」
「……え、えへ？」
「どけ」
「げふ！」
ニコリと微笑んだイザベラに笑みを返すと腹を蹴られた。

「全くお前のその獣性はどうにかならないのか？ライザー様と同じだな。助平め……」
　ジト目で睨んでくるイザベラ。罵倒しながらもさらっと主と同じ扱いしてたぞ今。
まあ、別に不満があるわけでもなさそうだが。
「けど、毎回毎回悪いな。つきあってもらって」
「かまわん、弱い男は嫌いなんだ」
「ん？なら俺のこととかほうって置くのが普通なんじゃ」
「頑張ってる男は好きなのさ。お前も、良く見れば顔は悪くないしな」
「――――！」
「何だ、照れたのか？ハーレムを作りたいなどと言う割には初なやつだな」
　クククと笑うイザベラ。く、これが大人の余裕か。
「まあしかし、私を追いつめるのに必要な倍化の数も減っている。楽しいな、徐々に追いついてくる弟子というのは」
「お、楽しんでくれてんの？ならお礼におっぱい……冗談です拳握らないで！え、えっと……なら、デートとか？」
「……ふむ。そうだな、なら私から一本取れたらデートしてやろう」
　よっしゃあ！やる気出てきたぁ！

「おいおいライザー、お前んとこのハーレム要員取られそうだが、良いのか？」
「……俺はな、伊月。元々はただハーレムを作りたいためだけに眷属を集めていたんだ」
俺の言葉にライザーはイザベラ達を見下ろしながら語り出す。
「俺は女を俺達男の価値を高める道具として見ていた頃だ。気づいて、後悔した……イッセーは良いやつさ。イザベラだって名家でもなんでもない、幸せになれるなら応援するさ。だが、もしイッセーがイザベラ泣かしたらそん時は殴りに行くがな」
「……お前どっちかつーと父親みたいだな」
俺の言葉にライザーはフッとニヒルに笑う。と、その時だった、俺達がいた屋上に、扉が開いた音がしなかったのに人影が増えていることに気づく。
幼女だ。ゴスロリ幼女がいた。
「……手元にはいないタイプだな」
「おい」
「冗談だ。だが、気づいてるか？あのガキ……ガキ？人間じゃない」
ライザーが緊張した面持ちで幼女を睨むが幼女はライザーを無視してトテトテ俺の

下に向かってくる。
「……我、見つけた」
「……何を？」
「グレートレッドに勝つ可能性。我に手を貸して欲しい」
？駄目だ、何言ってるかさっぱり解らん。助けを求めてライザーを見るとライザーは顔を青くしていた。
「グ、グレートレッドを倒したいだと……それに、圧倒的すぎて気づけなかったが、これはドラゴンの気配……まさか、コイツは!?」
この子のこと知ってんのか？やけに顔を青くしてるけど。俺は首筋をつかみ俺の顔の高さまで持ち上げてみる。
「……」
「……」
ガラスのように、俺を映しているはずなのに何も映していないと感じる空虚な瞳と目が合う。ライザーが何やら慌てているが、どうするか。
「……取り敢えず、家で飯でも喰うか？」
「お、おい!?」
「……メシ……？喰う？」

「ご飯を食べるって意味だよ」
「……ご飯。我、食事不要。取ったことない……どんな感じ？」
「ふっふっふ。俺は料理の腕には自信がある。うまいぞ」
「うまい？我、知らない。うまいってなに……」
　なるほど、何も知らないのか。そういう子もいるんだな。
「よし、じゃあ俺が何か美味い物を作ってやる。もう食いたくないと思ったらまずい、もっと食べたいと思ったら美味いといえばいい。解ったか？」
「……ん」
　ああ、やっぱりだ。このガキ北斗に少し似てる。放っとけねーな。ライザーははぁ、と呆れたようにため息をはいた。
「……夕飯、俺も食いにいって良いか？無知な友を逃がす盾ぐらいにはなってやるさ」
「？良く解らねーけど、まあ良いぜ。でも今晩は鶏肉だぜ？」
「関係ねーよ。鶏肉ぐらい食うわ」

食卓囲みました！

最近俺には人間の友人ができた。公の場では、フェニックス家の粗探しに励む他の家がうざいので公言しないが実を言うと俺は別に人間を見下しちゃいない。そもそも俺の眷属だって人間だった者が多いのだから当然だ。

そんな俺だから周りの目を気にしなくてすむ人間界の友人の家というのは実は月の楽しみだったりする。今回は、全然楽しめないがな。

チラリと伊月の肩に乗った恐らく……間違いなく世界最強の一角、無限の龍神オーフィスを見る。

「そういやお前、名前は？」

「我、オーフィス」

ＨＡＨＡＨＡ！確定しちまったぜ。ここまでの知性と力を持ちながらオーフィスを自称するなんて恐れ多いドラゴンはいないだろう。間違いなく本物だ。

「伊月、おかえり……」

「おう北斗、ただいま」

と、伊月の家に入る前に伊月の同居人と合流した。確か、七星北斗とか言う女だ。裾

が擦り切れた巫女服を着ているが実は古いのでもなんでもなく、伊月が北斗の為に頑張って作ってるんだとか。複製すりゃ良いのにと思ったが複製は年期も複製してしまうのでNGらしい。

「あ、炎……」

放浪癖のあるらしいコイツは俺やレイヴェルの事を炎と呼んでくる。伊月曰わく、北斗は本質を見ることが出来る。否、本質しか見ることができないのだとか。唯一認識できるのは伊月だけ。後は珍しい本質、イッセーなら赤い龍、奈阿なら蝶々と分けている。

そんな北斗は伊月の肩に乗っているオーフィスを見て首を傾げる。

「……蛇？」

「……ん？」

伊月が似てると言ったの、解る気がするな。どっちもぼーっとお互い見つめていた。そしてほぼ同時にお互い興味をなくした。

「これ、何？凄い力、感じる……こっちの女も、強い」

そういえば俺は何時だったか伊月は女に負ける少し情けない奴だと思ったことがある。それは勘違いだった。こいつの同居人は元シスターだというアーシアを除いて規格外ばかりだ。

特に群を抜いてワルプルギスの夜という謎生物と奈阿という和服の美少女がヤバい。オーフィスが感心するレベルみたいだしな。

「我に力貸して。共にグレートレッド倒す」

「キャハハハハ！」

「？キャハハ」

ワルプルギスは基本笑ってばかりだ。今もオーフィスのお願いに対して返事することなく笑い、オーフィスも真似している。

「よ～し、出来たぞ。あ、奈阿はこれな」

そう言って持ってきた料理を並べていく伊月。奈阿は特殊な布で作った服で抑えているが本来は常に猛毒を放っているらしく、大概の物は唇に触れただけでも溶け崩れてしまうらしい。故に品種改良した毒に耐性を待たせるために逆に別の毒を持った食材を使っているそうだ。うっかり食えば下手したら死ぬらしい。

「……美味い？もっと欲しい」

オーフィスは覚えたての単語を使いながらおかわりを要求する。伊月はお代わりをよそってやり、たくさん食べろよーなどと頭をなでている。最強のドラゴンを子供扱いかよ、まあ知らないからこそなんだろうがこれは……大丈夫だよな？子供扱いされてブチぎれる性格とかじゃないよな？

恐る恐るオーフィスの顔を見てみればポカンと首を傾げ、しかし数秒たつと目を細めた。猫だったら喉でもならしそうだな。
「……む……伊月、これも撫でる！」
と、オーフィスが北斗に押しのけられコロリと床を転がった。っておいい!?だ、大丈夫か？
オーフィスはジッと伊月に抱きつき頭を撫でて貰っている北斗を見る。と、不意にそんなオーフィスの頭を白い手袋に包まれた腕が撫でる。奈阿だ。
「う……うぅん……」
オーフィスは気持ちよさそうな声を出した。
「キャーハハハハ！」
「うお!?吃驚した～……」
急にワルプルギスが笑い出し思わずビビっちまう。いやだってねえ、大きさを変えて人間サイズになっているとは言え感じる魔力が禍々し過ぎるし大き過ぎるんだもんよ。
「ああすまんすまん。ほら、ご飯だ…」
「アハハハハ！」
伊月は黒い何かを取り出すと黒い靄がワルプルギスに吸い込まれていく。
「……それは？」

「疑似グリーフシード、魔女は生まれないけど周辺の負の感情を吸い込む。ワルプルギスは負の感情がエネルギー源だからな。まあ、中にある魂達が放つエネルギーでも十分なんだろうが」

魔女？魔女って魔法を覚えた人間の女を指すんだよな？何でここにその単語が出てくるんだ？

「我、満足」

口元をアーシアに拭かれながらオーフィスは無表情ながら満足そうに言う。

「ここにいる皆、アーシアとライザー、伊月除いて強い。我と一緒にグレートレッド倒そ」

「私達にはグレートレッド倒す理由がないわよ？」

コロンビーヌの言葉にオーフィスは首を傾げる。そして掌から黒い蛇を生み出した。

「これあげる」

あれは、間違いなく力の塊だ。オーフィスの、無限の龍神の力の一部、力を欲しがってる貴族達が喜びそうだな。

「……いらない」

「何故？皆欲しがる」
「俺は強くなりたいけど、強くなる方法は自分で探すさ。他人の用意した道には進まない」
「……解った」
　オーフィスはそういうと蛇を掌の中に戻した。
「それでも我、皆の力借りたい。どうすれば良い？」
「そうだな……お前のために命を懸けても良い、そう思えたらどんな危険なことだって手伝ってやるよ」
「それは、どうする？」
「ま、つきあってりゃそのうちな……ここに住むか？」
　おい！何さらっと世界最強のホームステイ先に立候補してんだよ、どんな食卓作る気だ、気が気じゃねーぞ！
「……解った。我、ここに住んでみる」
「あら、じゃあ今日からよろしくねオーフィス。あ、私はコロンビーヌよん」
「奈阿じゃ」
「キャハハ！」
「……北斗」

「アーシア・アルジェントと申します」
「伊月だ、よろしく」
「……我、オーフィス」
端から見ると心温まる光景かもしれないが、事実を知ってみると凄い絵だな。ただでさえプライドの高さで有名なリアスが妙なことをしでかさないといいんだが、本気で。

その頃、駒王町に近づく二つの影があった。
「はぁ、こんな形で戻ってくることになるなんて」
「そういえばお前は昔この地に住んでいたんだったな」
「そうよ。イッセー君、元気かなぁ」
「おい、私達の使命を忘れるな」
「解ってるわよ、私達の使命は……」
「盗まれた聖剣を取り戻すことだ。最悪、破壊しても良い。核さえ無事なら直せるからな」

「ところで奈阿、この鉄屑、何ゴミで出せばいいと思う？」
「……俺の気のせいじゃなければそれ、聖なる力の残滓を感じるんだが」
「流石悪魔のライザー、そういうのには敏感か。はぐれ悪魔祓いが持ってた聖剣らしい。まあ修復は不可能だからゴミと変わらんだろ」

教会の使者来ました！

「今日も修行につきあってもらって悪いな、何か食ってくか？」
「ふむ。おばさんの料理はうまいからな、頂こう」
鍛錬の帰り、イザベラを家に誘うと嬉しそうな気配を放つ。イザベラはすっかり母さんの料理のファンだからな。
「――ッ！」
「ん？」
不意にイザベラが表情を険しくしてある一点を睨む。そろそろ俺の家で、睨んでいるのは玄関だ。正確には玄関の前にいた怪しすぎる2人組。
なんだありゃ、ローブ？凄い不審者だな職質とかされなかったんだろうか？
それにしてもイザベラが警戒しすぎな気がする。俺は最近覚えたばかりの縁関知という技術で2人組を見つめる。見かけた程度の縁だ、あまり強くない……はずだけど片方は少し強いな。どっかで会ったことあるんだろうか？と、凝視していると2人組が此方に気づいた。
「あ、イッセー君！」

「……誰？」
「え!?私だよ、私私！」
私私詐欺か？いや、縁をみる限り親しかった過去はあるみたいだけど……。
「紫藤イリナだよ！昔良くヒーローごっこしたじゃない！」
「……え、男じゃなかったのか!?」

「あらあら、男の子と勘違いしてた？ごめんなさいねイリナちゃん」
「いえいえ、私もあの頃はやんちゃしてましたから……」
イリナと母さんは楽しそうに話している。本当にあの時の友達だったのか、ずっと男の子だと思ってた。
イリナとその連れ、ゼノヴィアというらしい女とイザベラを連れ家に上がった俺とイリナ。さっきからゼノヴィアさんの視線がキツいな。
「それにしても久し振りの再会、何があるか解らないけどイッセー君が早まってなくて良かったわ」
そう言ってイリナはイザベラを見る。いや、睨む。
教会関連の人間らしいから、悪魔であるイザベラは敵なのだろう。しかしならば何故

敵地に？

戦争を仕掛けに……じゃ、ないよな。それなら家の前で戦闘になってもおかしくない。一般人の被害を考慮するならさっさと避難誘導しているだろうし。

「イリナ、だったか？私の名はイザベラ。ここ最近毎日イッセーに喚ばれ相手している者だ」

「――――な!?」

イリナが目を見開きゼノヴィアさんが睨んでくる目を鋭くさせた。な、何？俺なんかした？

俺とイザベラが首を傾げていると母さんがやれやれと肩をすくめる。

「最近、イッセーは強くなろうとしてるのよ。イザベラさんはそんなイッセーの修行相手としてね」

「な、なーんだ、吃驚した～」

「ふん。悪魔に教えを請うなど言語道断だ……本来なら神の名の下断罪してやりたいよ」

ゼノヴィアさんはどうやら悪魔がお嫌いなようで。教会の信者だから当然か。でも俺はクリスマスを祝って元旦には神社行く日本人ですから、神に忠誠なんて誓ってないんだよな。

命を懸ける相手は俺が決める。だからそんな罪人を見る目で見られたって痛くも痒くもない。

そして2人は去っていった。一応、伊月にも連絡を入れた方がいいかな？

次の日、木場が俺と伊月を迎えに来た。伊月は嫌がっていたが俺が朝、イリナ達教会の件を話していたからかしぶしぶついて行った。

「まだ話を始めないのか？」

「この町には私達の下に所属こそしていない者の関係者がいるのよ。彼等とも話しておいた方がいいでしょ？」

「そこで眷属候補とか寝言をほざかなかったのは誉めてやる」

と、伊月が部室内に入る。最近ようやくしつこい眷属勧誘が行われなくなった。会長が頑張って説得してくれたらしい。

なかなか止められなかったお詫びにとお菓子を持ってきたが伊月が会長のお菓子はクソまずいからいらないと言ってたっけ。つーかあの人も悪魔だったんだよなぁ。グレモリー先輩とは親友らしいが、一方的に思われてて仕方なくとかじゃないよな？グレモリー先輩、おっぱいは素晴らしいのに残念だ。

「兵藤一誠……？それと、誰だ？」
「葉隠伊月。人間だ」

話を纏めると……
教会で保管していた聖剣エクスカリバー三本が盗まれちゃった！
犯人は堕天使、奴は駒王町に行ったらしいぞ、悪魔の領地だ！
聖剣は教会の物なんだから手を出さないでよね、ていうか聖剣を壊したくて堕天使と手を組んだんじゃないでしょうね!?
後半が朝のヒロイン目覚ましでツンデレが出たのを思い出したせいでツンデレ風になってしまったが、概ねこんな感じ。伊月は何やら考え込んでいる。
「……なあ、その聖剣を盗んだ奴に白髪の発言がイかれた俺等の同世代、交じってるか？」
「……フリード・セルゼンの事か？なるほど、奴なら協力してもおかしくないが、何故だ？」
「俺の家族の1人を襲ったみたいでな。返り討ちにした。その時そいつが二本の剣を持っててな」
「――――！」

「まさか、仮にも最年少悪魔祓いのフリードを下せる者が一般人にいたのか。して、奴は？」
「死んだ。その時の持ち物は無事だった分だけ回収してるから、取ってこさせる。あ、もしもし？」

伊月が電話をかけて数分後、アーシアと奈阿さんが部室の扉を開いてやってきた。
何やら袋を持っているけど、剣とか入っているようには見えないな。
「ほら、これだろ？」
「……え？これ……え？」
「……は？」
そこにあったのか剣の柄と溶かした鉄を適当に固めたような鉄屑。
「ね、ねえゼノヴィア……これ……」
「何度か見たことはある。一致しているな……こっちの鉄屑も、微かだが共鳴している……しかし、これは……貴様等、どういうつもりだ！」
「片方はとっさでな、本気ではなかったが手加減もできず刃の部分を溶かしてしまった。もう片方は、手加減はしたんじゃが……」

「ふざけるなよ、砕けたとはいえ仮にもエクスカリバーの一本、故意にでも行わない限り、人間に壊せるはずがない……」
「そのようなことを妾に言われてもな……」
ゼノヴィアさんの発言に困ったように言う奈阿さん。この人は滅茶苦茶やばいからなぁ。ドライグ曰わく『真に万能の神が誰にも触れられない、傷つけられないようにしたかのような酸性の劇毒』らしい。あるいはその神の一部で作った武器や力を宿した武器なら通じるかもしれないとのこと。
「ま、まあ良い。回収は出来たのだからな、後一本か……」
「……核は壊れてるけどな」
俺はボソリと伊月が呟いた言葉を聞こえないふりをした。世の中には知らない方が良いことも、きっとある。
「……時に、気になっていたのだがそちらの娘はもしや魔女アーシア・アルジェントか？」
「え？あなたが一時期噂になった『魔女』になった『聖女』さん？悪魔や堕天使をも癒やす能力を持っていたらしいわね？まさか悪魔の庇護下にいたなんて」
「しかし、悪魔の庇護下とは聖女も落ちるところまで落ちたものだ。いや、悪魔になっていないだけましか？よもや魔女となったその身でまだ信仰の匂いを放っているとはな」

「……捨てきれないだけです。ずっと、信じてきたのですから」
「そうか。それならば、今すぐ私達に斬られると良い。悪魔を癒やす罪深き存在でも、我等の神ならば救いの手を差し伸べてくれるはずだ」
　だからこの会話も、俺にはなーんも聞こえんね。何が起きてるのかなんて知らん知らん。
「おい小娘、黙って聞いておればアーシアを魔女じゃと？罪深き存在じゃと？寝言を吐くのは大概にしろ小娘が。聞けばアーシアの力とて神が与えた物。罪深き存在というなら、そんな物を造った神であろうに……それとも、貴様等の神は自ら造った罪深い力とやらで差別を起こす人間達を見て楽しむ真生の屑か？」
「貴様、我等の神を愚弄するか！」
　あー！あー！聞こえなーい！
　俺はなんも知らねーだー。奈阿さんの苛立った声もゼノヴィアさんの敵意も何一つ関知しておりません！
「俺等のアーシアを侮辱したのはそっちが先だ。神なんざ信奉してない俺等に取っちゃ、アーシアは神のありがたーいお言葉より大切な存在なんでね」
　伊月、お前もか!?
「面白い、それは教会に対する宣戦布告と受け取るぞ……」

「ちょうど良い、僕が相手になろう」

何故お前まで!?

俺が驚いていると不意に木場に奈阿さんが近づくとその手を取る。そして、戸惑う木場を壁に叩きつけ気絶させた。

「お主の私怨に我等を巻き込むな。これは我等の私憤故、我等のみで片を付ける…」

「そういうこった。その前に決め事をしとこーぜ教会の戦士達。後でこういう条件なら勝てたんだと言われても面倒だからな」

「……帰ろう」

決闘しました！

旧校舎の裏側で睨み合う伊月と奈阿、そして教会の戦士達。

奈阿は憤っていた。アーシアの優しさを知っている。知っている上で、アーシアは優しすぎると評価する。

きっと差し伸べられた手がどれだけ罪にまみれていようとその手を受け取るだろう。そんなアーシアを、選りによって罪深い存在などと、アーシアにその罪とやらを押し付けた神並みに気に入らない。

もちろんアーシアとて、敵対する勢力の者を癒やすという行為をした。しかし今まで聖女として癒してきた数に対し、たった一度であろうに。だと言うのに神の意志に逆らった大罪人などと、ならばアーシアだけでなく神器を造った神にも疑問を抱くべきであろうに……。

「さあ覚悟しなさい！主を侮辱した罪、償ってもらうわ！」

「黙れ小娘。妾とて、アーシアを侮辱され、イラついておるのだ」

聖剣を掲げ叫ぶイリナに対して奈阿も毒の霧を噴出する。伊月を転生させた暇つぶしが大好きな規格外な神により完全に再現された常世の神、あるいは常世の蟲が自身の

力の半分を与え、誰にも傷つけられないように与えられた酸性の毒がジュワジュワ音を立て溶ける。
「っ！それがあなたの神器ね、負けないんだから！」
イリナはそう言って突っ込んでくる。
（……ふむ）
基礎はしっかりしている。身体能力も素と聖剣の恩恵が合わさりたいしたものだ。並の悪魔なら相性も上乗せされ十分相手取れる。まあ、並の相手ならだが。
奈阿は人間を超える身体能力を持つ蟲狩複数と相対しながら周りを気遣える程の戦闘能力を有する。例え神の生み出した模造品であろうとそれは健在。
イリナの足下を溶かし体勢を崩した腕を取り放り投げる。空中で体勢を立て直そうとするイリナだが全身を毒の霧が覆う。
ジリジリと焼け付くような痛みが肌を走り喉に異物でも混じったかのように呼吸がしづらくなる。
「殺しはせぬ。アーシアを侮辱され怒り、殺したとあってはアーシアが悲しむ。お主如きのためにアーシアを悲しませてたまるものか」
「――――っ！」
つまりは手加減しながら十分勝てると言外に言われイリナは表情を険しくして立ち

上がる。教会の戦士として、ずっと鍛えてきたのだ。上級の悪魔や堕天使ならいざ知らず、人間に負けるわけには行かない。
「せやぁぁ！」
「……心意気だけでは勝てぬよ。が、心意気は買ってやろう『死爪』」
奈阿が指を一本立てるとその指の爪が黒く染まる。いな、黒い霧が爪の形を取り伸びる。
毒の爪は一瞬の拮抗もなく触れた場所を溶かし、聖剣を真っ二つに変えた。
「今回は核は壊れておらぬぞ……多分」

奈阿は終わったか。俺も負けてられないな。バギィィン！と音を立て砕けた刀を放り捨て新たな刀を複製する。
しかし厄介だな。力任せのパワーバカ、テクニックはないに等しいが聖剣の能力が破壊力増加と、脳筋のアイツにぴったりだ。
「先程から現れる刀……これといった力は感じないな。刀剣創造（ソード・メーカー）か？これはまた、マイナーな神器だ」
「そう思うか？なら、俺も少し本気を出すとしよう」
「ほざけ！」

無防備に迫ってくるゼノヴィアを見て俺はふぅ、と息を吐く。

「月島流――――」

俺の中には様々な知識がある。光言衆、インキュベーター、自動人形、シロガネなどの組織から、中国拳法の知識、剣術の知識。

知識があるから使いこなせるなんてはずがなく、会得に苦労した。今から使うのは苦労した甲斐があった技――

「富嶽鉄槌割り！」

ズドン！と衝撃が大気を揺らし土煙が舞い上がる。俺の足下には円形に叩き潰したような独特な斬撃痕が残り、ゼノヴィアはその衝撃からか、持っていた剣を落としていた。

剣は深く突き刺さってしまっているが折れた様子はない。良かった良かった。これ以上壊したらまた何を言われるか。

奈阿の方も今回は核が無事だし直せるだろ。

「……私の、負けだ」

「潔いね」

「奥の手はあるさ。が、それはコカビエルに取っておきたいのでな」

「……そうか」

決着は付いたと判断したのかグレモリーが結界を解く。するとアーシアが紫藤の下まで駆けていき赤くなった肌を癒していく。
「……我々は、彼女を責めたんだがな」
「アーシアに取ってそれは命を助けない理由にならないんだろ」
「そうか……」
ゼノヴィアがふっと笑ったその時、塀を飛び越え何かが降ってきた。北斗だ。片手に何か持ってる。
「……！」
鼻をひくひく動かしながらキョロキョロ辺りを見回し俺に気づくと駆け寄ってくる。ちなみに持ってたのはボロボロのおっさんだ。北斗に引き摺られ顔面を地面に擦りながらうめき声一つ上げていない。
「伊月、カラス。伊月の敵、これが倒した」
「カラス？」
堕天使の呼び方だな。北斗は堕天使なんかと敵対すると、しばらく問答無用で敵認定する。前に堕天使どもぶっ殺しに行ったばかりらしいし、まだ敵扱いだったのだろう。そんな時に北斗の前に現れるなんて不幸な奴。
と、哀れんでいたら堕天使のおっさんがカッ！と目を見開き北斗に向かって槍を放

つ。受け止めた北斗だがその隙におっさんは上空に飛ぶ。
「くそ！クソが、やってくれたなぁ！油断した、しかしここは先程と違い室内ではない。もはやお前に勝機はないぞ！」
堕天使のおっさんはそう言って光の槍を大量に生み出す。それを見てグレモリー達が表情を険しくしているが、どうした？
「死ね！」
大量に放たれた光の槍を見て北斗は片手を前に突き出す。そして――
「邪魔」
手を凪ぐと同時に放たれた呪力が光の槍を飲み込み消し去る。
北斗には俺が造った人外達を含めた１０８人分の末期（まつご）の血を溜めた特性の棺を幾つも取り込んでいるからな。
モデルがどんな存在かは知らんが少なくともモデルより強くなっているだろうな。
「お前、鬱陶しい。さっさと死ね」
「な!?」
北斗は一瞬でおっさんの背後に移動すると十枚の翼全てを引きちぎる。ブチブチ音を立て背中から剥がれていく翼。手羽先食いたくなってきたな。
「勝ち。誉めて」

「よしよし、北斗、あんまり力を込めるな、俺が死ぬから……」
　ぎゅーっと抱きついてくる北斗に力を込めないように頼み頭を撫でる。そして翼を引きちぎられた痛みで気絶したのか地面に転がるおっさんを指さす。
「ところでこのおっさん、どうする？」
「……それ、今回の主犯であるコカビエルなんだが……」

堕天使、遭遇しました！

北斗はそこに存在した時から人として認識できる者は1人だった。名を伊月。

伊月だけが北斗に認識できる。伊月だけが北斗の特別。とはいえ、それだけなら別に懐いたりはしない。

単純に、優しかった。最初は怯えるような視線、でも次は申しわけなさそうな視線、何時しか優しさのこもった暖かい視線に変わった。

その瞳が好きだ。

撫でてくれる手が好きだ。

抱きしめてくれる腕が好きだ。

名を呼んでくれる口が好きだ。

日の匂いを感じる髪が好きだ。

全てが好きで、全てが欲しい。

何時だったか押し倒し口付けをして、衝動的に伊月の舌を引きちぎり食べた。しばらく怒られたが、もうしないと、反省したと泣き出した自分をちゃんと反省したことを確かめてから慰めてくれた。嬉しかった。

伊月の敵は全て壊す。そう決めた。決めたのに、伊月の敵は後から後から湧いてくる。

伊月が嫌がっている蝙蝠。これは何故か伊月から止められた。次にカラス。この前、伊月がダテンシ……カラスの呼び方を呟いて苛立っていた。敵意を持っていた。

つまりカラスが敵として現れたという事だ。

直ぐに殺しに行った。

だというのにまた現れた。今までのカラスに比べて少しだけ強い。少しだけ。

「妙な気配がするな。悪魔や天使、ましてや堕天使でもなければ妖怪とも違う。しかし人間でもない、なんだお前は、どこの誰だ？」

コカビエルは拠点にしていた廃墟にやってきた少女を見て尋ねるが少女はボーッと虚空を見つめる。

そういえばこの廃墟は瓦礫が全くなかったり逆に集まって山になっている場所があった。彼女の隠れ家的な場所だったのだろうか？

格好は巫女服。しかし裾がすれぼろぼろだ。異教の追放者か何かだろう。

「まあ良い、死ね」

しかし異教徒なら異教徒でこの町を歩き回れるとは思えない。仮にも魔王の妹が見

逃すはずがない。つまりは関係者、ならば生かしておく理由もない。コカビエルは光の槍を少女の顔に向かって放つ。

眼前に迫った光の槍にようやく少女が反応した瞬間にはよけるまもなく北斗の体が仰け反った。

「……む？」

しかし血が流れない。不思議に思うと少女はゆっくり上体を起こし、顔が見える。顔は無事だった。光の槍は彼女の歯によって受け止められており、少女はそのまま槍を噛み砕く。

「ほお！」

手加減したとはいえ防がれるとは思っていなかった。フリードも帰ってこないし、暇をしていた。ちょうど良い暇つぶし相手になりそうだ。

少女も漸くコカビエルを認識したのか左右色が異なる瞳でコカビエルは見る。

「――――!?」

ぞわりと悪寒が走る。まるで全てを見通すかのような瞳。忌々しい父たる神を思い出す。

「……か……カラス……」

「何だと、貴様！」

カラス扱いされ激昂するコカビエル。その瞬間少女はコカビエルに向かって飛んできた。飛距離も速度も人間のそれではない。人外でもそういない速度の接近に一瞬虚をつかれるも即座に翼で防御態勢をとる。瞬間、吹き飛ばされた。

「……が!?」

翼に衝撃が走ると同時に床に向かって落下する。途轍もない威力だ。接近戦はまずい！

そう判断したコカビエルは再び飛翔し距離を取ろうとするが少女は何と壁を踏み抜きながら走ってきた。

「な!?」

「あああ！」

そのまま床が崩れたことにより天井からぶら下がっている状態になっていた上階の柱をへし折り叩きつける。とはいえ、ただのコンクリート。コカビエルは片手で破壊するが破片の間から白い手がのびてきて顔面を掴む。

死人のように冷たい手がギシリとコカビエルの頭蓋を軋ませる。

「はは」

ドゴォ！と地面に押しつけられ、そのまま地面を削りながら少女に引きずり回される。堕天使の自分にとっては脆いとは言え、この速度で地面を削り続ければダメージは

少なくない。
そして少女は引きずるのに飽きたのか、今度は力任せにコカビエルを振り回す。
柱に、壁に、床に、瓦礫に、残っていた家具に何度も体をぶつけやがて意識を失う。それでもなお少女はコカビエルを振り回し続け、また飽きたのかやめた。
「……そ……うだ……伊月に、見せよ」
そういうとコカビエルを掴んだまま歩き出す。そして――
「ひ、ひぃ!そんな、コカビエルが……バカな!」
騒ぎを聞きつけたのであろう男が腰を抜かして少女を化け物を見るような目で見ていた。いや、事実聖書に記されるほどの堕天使を一方的に倒すなど化け物だろう。
その化け物が此方に来ている。男は顔を青くして必死に床を這おうとするが肥満な体はろくに鍛えてもいない腕では動かすことが出来なかった。
「ま、待て!そうだ、これをやろう!だから頼む、見逃してくれ!」
男はそういって輝く球体を取り出し命乞いをする。が――
「……」
「……へ?」
少女はあっさり男の横を通り過ぎる。ともすれば足がぶつかっていたかもしれない距離を、まるで男が見えていないかのように。

ブチリと、男の中で何かが切れる。

「……ふ、ふざけるなよ……私を、誰だと思っている……これを何だと思っている！」

男は自分が優秀であると自負していた。聖剣の適性を持たぬ者に適性を与える技術を確立した優秀な人間だと。その自分を、そして自分が造った素晴らしい物を無視だと？

別に見えていないわけではなかった。一瞬だけ見て、直ぐに興味を失いそこに居ることすら忘れられただけだ。

「ふざけるな……ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな！」

不当だ、不快だ、不合理だ、不条理だ、自分がそんな目を向けられて良いはずがない。この、誰しも聖剣が扱えるようになる世紀の発明を無視されて良いはずがない。

男は怪しく光るそれを胸に押しつけ、走り出す。目指すは剣が保管されている部屋。

「……？」

カラスを運ぶ途中、北斗は不意に振り返る。先程自分がいた場所から妙な気配がした気がした。

「……未練？」

そう、この気配は知っている。自分に近い、死に際の敵が良く漏らす未練という感情

だ。それが今、何かを飲み込んだ。
まあ、しかしどうでも良いかと再び歩き出す。早く持っていて、伊月に誉められたい。目指すは

男は、バルパー・ガリレイは走っていた。
自分でもどこを目指しているのかわからない。しかし、因子を取り込んでから胸の内から湧き続ける何かに従い走っていた。
やがて、何やら不気味な気配を放ちブツブツ呟いている男を見つける。途端、胸の内から湧き続ける何かが、バルパーの意志を無視して口を動かさせる。
「……イザイヤ」

宿敵見つけました！

残りの聖剣を探してくると北斗が指さした方向に教会組が向かい、イッセーも何時の間にか帰っていたので俺らも帰ろうとすると立ちはだかる影があった。木場だ。

「……聖剣使い達はどこだ……」

「ああ、あやつ等なら彼方に向かったぞ」

木場の言葉に奈阿が指さすと木場は何も言わずに去っていった。グレモリーと何やら言い争っているが後は向こうの領分だろう。俺は北斗が引きずってきたコカビエルを見る。

「さて、これどうするか……教会の奴らも持っててくれりゃ良いモノを…」

「なら、俺が運ぼう」

と、不意に上空から声が聞こえる。気配は感じていたがさっきから様子を見続けてるだけだったから来ないと思ってた。

「……白い、龍……と、六匹の蝙蝠」

白い龍？なる程コイツがイッセーの宿敵というわけか。しかし、六匹の蝙蝠？

確か北斗が描いてくれた絵によると、堕天使、天使、悪魔は普通の人間、つまり北斗

にとって人の形をした黒い塊にそれぞれの翼が生えて見えるんだったな。それが六匹、つまり12枚の翼……12翼の悪魔……。

「お前、ルシファーか？」

「良く解ったな。その通り、俺はルシファーの血を引いている。が、今は堕天使の世話になっているがね」

ふーん、どうでも良いや。しかしルシファーの血縁なのに堕天使の世話ねぇ、ルシファーは元々天使っていうしな。不思議でもないか。

そのままルシファーはコカビエルを連れて飛び去った。

「じゃあグレモリー、俺達も行くな」

「え？ええ……あら、コカビエルは？」

こいつ気づいてなかったのか。木場も何時の間にかいなくなってるし、言い争いの末眷属をやめられでもしたか？

木場は唐突に自分の嘗ての名をつぶやいた老人を見て目を見開く。一瞬だけ、憎悪が消えた。しかし彼の手に握られる剣を見て表情を変える。

「聖剣！」

「――……っ、おお、おお！そうだとも！私が開発した技術で、私が扱えるようになった

聖剣だ！」

木場が殺気を放ってもしばし呆然としていた老人だったが数秒経ち目に光が戻り、しかし虚ろなまま叫ぶ。

「お前が……――！」

そして老人が語った言葉に怒りがこみ上げてくる。自分が開発した技術、そう言った。つまりは――

「お前が、聖剣計画の責任者か！」

「そうだ、そうだ！なのに天使共は私を異端と呼んだ、私が作り上げた技術を間借りしているだけのくせに！くせくせくくくせせせ……」

「……どうした？」

様子がおかしい。老人の目はギョロギョロ動き口から泡を吹き喉を皮膚が削れ肉が見え始めるほど掻き毟り始める。

「お、おい！何をしている！」

「こりゃ完全に呪われてるな」

「!?」

不意に聞こえてきた声に振り向けばそこには自分から聖剣を破壊するチャンスを一度奪った男がいた。

伊月は木場に興味もくれず男の胸に手を当てる。
「……棺と似てるな……けど少し違うな。生前何かを抜かれ死後そこに定着したのか。起きたのは、北斗辺りとでも接触したのか？」
「何の話だい？」
「こっちの話だ。取り出すのは……無理そうだな。呪いで完全に蝕んでる。そこまで憎いか」
はぁ、とため息をはき立ち上がる伊月。完全に老人から興味が失せたようだ。
「……今、彼に何が起きている」
「取り込んだ何かに宿ってた死霊に呪われてんだよ。一体一体は絞りカスみたいなもんだがその数が集まれば十分脅威だろ……」
呪い？
何に呪われているというのだ。木場は伊月が去った後、そっと老人にふれる。途端、老人の体が強く輝き複数の少年少女達が現れる。
「――……っ！皆！」
それは、嘗ての同士達であった。自分を逃がしてくれた、生かそうとしてくれた恩人達であった。
『……イザイヤ』

「皆、僕は……僕は……――――っ！」
『生きていたんだね』
『良かった。これで心残りはない』
『どうしたの怖い顔をして、ほら、笑ってイザイヤ』
何と言おう。彼等を犠牲に生き延びてしまった自分は、何と言えばいいのだろう。
言葉が出ない木場に少年少女達は優しくほほえむ。
『復讐かい？』
『ああ、だから怖い顔なんだ』
『でもねイザイヤ、私達はそんなこと望んでいない』
『そうさ、君が生きていてくれれば、それで良い』
「……え？」
『君が世界を見て、生きて、最期のその時まで生ききった、そう思ってくれればそれでいい』
『復讐なんて必要ないさ。こいつは僕等が連れて行く』
『だからイザイヤ、笑って？そして生きてくれ！』
少年少女達がそういうと一人、また一人と消えていく。彼等が消える度に、老人から何かが抜け落ちるように痩せ衰えていく。

やがて最後の一人が手を振り消えると同時に、嘗て弄んだ命達に呪われた哀れな男は服を残し塵となって消えた。

神様来ました！

最近木場が馴れ馴れしい。

俺が北斗に類似する、つまり未練による呪いの気配に向かい呪われた老人と木場に会ったあの日から親しげに話しかけてくる。

まあ遠慮も知ったのか迷惑そうな顔をすれば下がるし勧誘もしては来ないから良いんだが。

しかし不気味だ。

「それで私に相談しに来たんですか？」

「悪魔のことは悪魔に聞くのが一番だと思ってな……」

俺はソーナとチェスをしながら言うとソーナはため息をはきながら駒を動かしチェックしてくる。俺は王の間に別の駒を動かすが直ぐに別のチェックをかけられる。

「チェックメイト」

「あー！また負けた！」

「ですがなかなかお強いですよ」

「奈阿は趣味がババアだからな、将棋や囲碁なんかの相手にしてるうちにそこそこ……

コロンビーヌは機械だからその手のゲームはチート級だし」
だからまあ腕はそこそこあるつもりだ。一度も勝てたことないけど。
「しかしちょうど良いですね」
「ん？」
「実は私も、貴方に……貴方達に伝えたいことがあったので」
俺……達？
俺達ねぇ。つまり北斗や奈阿の事か。少なくとも向こうが把握してるのはあの二人だけのはず。
そして逆に言えば向こう、神話側に関する事だ。超面倒くせー。
「今度、この地にて三大勢力の会談が行われます。魔王様、天使長様両名から出てほしいとのことです」
「……堕天使は？」
「出来れば出てきて嫌ならせめて敵に回るな、と」
「魔王に天使もそれぐらい軽ければ良いんだけどな」
まあ仮にも1種族の長だ。脅威になる可能性がある以上、見極める必要があるのだろう。
堕天使側も適当すぎると言えばすぎるが、例えば俺が居ないところで三大勢力総出で

俺を監視させる腹積もりかもしれないな。
この場合警戒しているくせに勢力のトップが集まる場所に俺を呼ぶ魔王と天使を楽観視した馬鹿ととるか会談を通して結束しようとしてる堕天使を利口ととるか……。
或いは敢えてトップが居る場所に誘うことで敵意がないと伝えようとしている魔王と天使を利口ととるか、伝わることが解っていたはずなのに軽く接する堕天使を馬鹿ととるか、だな。
まあ俺とて神話を敵に回す気はないし、これを機にうざったい堕天使天使悪魔共の襲撃をなしにしてもらうか。
「最近北斗の気が立って、このままじゃ彼奴一人で全部ぶち殺しに行きかねないしな」
「……へ？」
てか連れてって大丈夫だよな？いきなり襲いかかるとか、北斗ならあり得そうなんだよな。でも連れてかなければ連れてかないで失礼に当たるだろうし。
一応は1種族の王達だ、誠意は見せるべきだろうし、いや北斗を連れてく時点で誠意がないと取られる可能性も……。
うーん、まあ、全員連れてけば抑えられるか。
「その会談、出席させてもらおう」
「……そうですか、すいません」

「謝る必要はねーよ」
「そういえば、そろそろ授業参観ですよね……貴方の方は、誰か来るんですか？」

誰か、ねえ。俺は四歳ぐらいの肉体年齢でこの世界に転移して、親はいなかった。金は毎月振り込まれるし、保護者も名義だけ存在した。
しかし今までの授業参観とか、三者面談で誰も来たことはない。敢えて言うならイッセーの両親だな。
が、今回の授業参観ではグレモリーやソーナの血縁、つまり魔王が来るはずだ。そんなイベントを、彼奴が見逃すはずがなかったな。
「おーい！伊月、元気かー？」
「……」
二十代前半のイケメンが満面の笑みで俺の名を呼びながら手を振ってくる。俺を転生させた神だ。
「……なあ、あの兄ちゃん知り合いか？」
「知り合いと言えば知り合いだな。もう数年は会ってなかったが……」

転生以来会っていない。だというのに来た。やはり魔王がいるからか？
彼奴が魔王程度恐れるとも警戒するともおもえないが、暇潰しの相手にはなるとでも判断したんだろうな。
「見たことねーけど」
「ずっと俺を見ていたとは思うぞ？会いに来なかっただけでな」

魔王サーゼクス・ルシファーは妹の領地に住み着いていたという人間、葉隠伊月について調べていた。
調べたところで彼が何処かの組織に所属していた形跡は無く、謎は深まるばかりであったが。
まず彼には両親がいない。後見人も存在していることになっているがどれだけ探しても見つからない。
そして彼と共にいる少女達。アーシア・アルジェントはすぐに情報を集められたが聖剣を修復不可能なほど破壊した奈阿、コカビエルを一方的にいたぶったという北斗、未だ謎の多いコロンビーヌという同居人については何の情報も得られなかった。
俗な言い方をするなら解らないという事が解ったわけだ。

つまり何も解らない。そして今日、さらに解らない者が増えた。
「おおあんたがサーゼクスか。うちの息子は扱いづらいだろ？当然だ！敵意をもたれてるものなお前！」
ゲラゲラ楽しそうに笑う葉隠伊月の親を名乗る男。葉隠伊月に血縁者などいないはずだし、後見人も戸籍上は女性だった。では彼は誰だ？
「くはは。警戒しておるな。無駄だ無駄だ、紙上の者がいくら足掻いたところで人間の世を知ることなど出来ぬだろう？それと同じ、我をいくら知ろうともがいたところで、貴様には我を知ることなど出来ぬよ」
何も感じない。彼からは、何の力も感じない。人の気配すらも。何なんだ、此奴は。
「くはは。精々足掻け、もがけ、悩め、惑え。我はそれが面白い。ではな、我はもういく。ああそれと、ホテルを探すふりをして伊月か兵藤の家に泊まるつもりなら止めておけ。イッセー辺りなら甘いから泊めるかもしれんが、我が殺すぞ？」
「――――ッ！」
この町にいる赤龍帝か、葉隠伊月に接触しようとしていたのは確かだ。どちらも脅威になる可能性もあれば心強い味方になる可能性もあった。少し早いが見定めたかった。だが、全身の細胞が訴える。目の前の男の言葉に逆らうなと。
「……グレイフィア」

「ホテルならすでに用意しております」
「……え？」
「悪魔でも契約相手でもない者の家に泊まるとおっしゃった場合力付くで連れて行くつもりでしたから」

「アナタね！ソーナちゃんを傷つけたっていうのは！ソーナちゃんのお菓子は確かにおいしくないけど、男なら女の子を喜ばせるために黙っているべき☆」
「……ソーナ、こりゃ誰だ？」
「単なる馬鹿です。ほうって行きましょう。それより、今度お菓子づくりを教えてくれるというのは本当ですか？」
「あの地獄を味わいたくないからな」
「……味わう……文字通りですね。味見して、私はこの世の地獄を知りました」
「え？あ、あれ～？おーい、ソーナちゃん？ねえ、おねーちゃんを無視しないでぇぇぇ！」

会談はじまりました！

三大勢力会議、指定された時間に駒王学園に行くとライザーとその妹の……ライザーと妹が出迎えた。

「今私の名前忘れてませんでした？」

「忘れてねーよ、レイヴンだろ？」

「伊月、レイヴァルだ」

「レイヴェルですわ！失礼すぎましてよお二人とも！」

何と、両方はずれか。イッセーの方が近いけど。

「悪いなレイヴェル、ほら、俺達ってあんまりあったことないから」

「貴方方に会いに行けばお父様もお母様もお兄様も皆、眷属に誘えそうかと聞いてくるでしょうからね。ま、もう叶わぬ事ですが」

確かに、少なくとも俺達の内一人は聖書に名を残す相手を一方的に下せることが解ったのだ。そんな相手を自勢力に引き込めばそれだけで他勢力にいらぬ警戒をさせ場合によっては敵対行動と取られる。

「そんな大物相手に良く案内役を買って出たな？」

「本当の意味でお前と親交を持つ悪魔は俺かソーナで、ソーナよりも俺の方が親しいつもりだからな」

　ま、確かに。ソーナともたまにチェスをしたがライザーは人間界の菓子、冥界の菓子を食い合ったりレーティングゲームの武勇伝につき合ったりある日酔っ払ったライザーが少し調子に乗ってコロンビーヌにボコボコにされて以来修行につき合ったりと色々してるからな。

「しかしその服装は？」

「ん？これか……似合うか？」

　こういう会談の場だ。制服の方が良いんだろうが正装となる制服、駒王学園の制服を着るとこの学園の支配者とか言ってるグレモリーの下についているみたいだ嫌だから特別にあしらえた服だ。イッセーは赤龍帝らしく赤いコートを羽織っており俺は黒のコート。コロンビーヌは相も変わらずゴスロリで奈阿は白い和服に大きな帽子、北斗は何時もの巫女服に、全身を縛る経文。暴れた時何時でも押さえられるように。

　アーシアはシスター服でワルプルギスは人間サイズになり相変わらず逆さまだ。

「……てか、お前その子も連れてきたのか」

「家族だし」

「……？」

ライザーに視線を向けられたオーフィスは首を傾げる。ついでに今オーフィスは俺の肩に乗っている。

「……お兄様、この子は？」

「……あー、とりあえずだ、そいつは色々面倒になりそうだから、偽名名乗らせとけ」

「解った。本名名乗るなよ、フィー」

「ん、我フィー。解った」

オーフィスはコクリと頷いたので頭を撫でてやる。北斗が羨ましそうにしてたので北斗の頭撫でてやった。

会談の場に行くと既に三勢力は揃っていた。おそらく天使長なのであろう金髪の美青年、グレモリーに良く似た髪の色をした男、ソーナ曰わく単なる馬鹿。そして堕天使であろうおっさん。その後ろにそれぞれの護衛達。グレモリーやソーナもいるな。あの銀髪は、この前の白い鎧か。教会からはゼノヴィアとイリナが来ているようだ。

俺は空いている席に座り他の面々もそれに続く。オーフィスは膝の上に移動してきた。

「ウヴヴゥゥゥ！」

「北斗、落ち着け……ほら良い子良い子」
「……♪」
　北斗が堕天使を睨みつけ唸り、巻き付いていた経文が千切れ始めるので頭を撫で落ち着かせる。
「で、俺が居ない間に会談は進んだのか？」
「あ、ああ。その前に一つ聞いて欲しい。この会談は、これが前提に話されているのでね」
「ん？ああ、何だ？」
「聖書の神は、すでに死んでいる」
「ふーん」
　至極どうでも良いことだった。俺キリシタンじゃないし。神なんてあの転生させた神様ぐらい興味ないしな。それにこの世界、神は腐るほどいるじゃん。俺達には関係ない。
「……え？」
「あ」
　いや、あったわ関係。アーシアは今でも神を信仰してるんだった。
「主が、居ない……なら、私たちに与えられる愛は……？」

「……」

蒼白とした顔で呟くアーシアに、ミカエルは悲痛そうな顔で首を横に振った。

「――――っ！」

アーシアはさらに顔を青くしてふらりと倒れ慌ててコロンビーヌが支える。

「……そういうのは事前に教えて欲しかったな」

「……申し訳ありません」

「ま、良い。それで、会談事態はどの程度進んでいるんだ？」

「会談自体は、今回の件について堕天使側の意志を聞いたところだ」

ま、その辺は俺には関係ないしな。あくまで俺は本題だけってわけね。ま、良いけど。

「それじゃあ早速聞きたいんだけどよ、そのガキ何だ？コカビエルを倒すなんて相当だぞ」

「その前に名を名乗ろうぜ？俺は葉隠伊月、剣術と拳法をたしなみ異能を持ったただの人だ。で、この子はフィー」

「ん」

「奈阿じゃ。こっちはワルプルギスの夜」

「キャハハ、アハハ！」

「コロンビーヌよん。こっちは北斗ちゃん」

「……」
「『赤龍帝』兵藤一誠」
俺達が一通り自己紹介すると最初に口を開いたのは堕天使であった。
「『堕天使総督』アザゼルだ。よろしくな」
「『四大魔王』の一人、サーゼクス・ルシファーだ」
「同じく、セラフォルー・レヴィアタンだよ☆」
「『天使長』ミカエルと申します」
大物ぞろいだな。イッセーも目を見開いて驚いている。
「じゃ、自己紹介も終わったところだし質問に答えよう。北斗は、屍。未練と妄執を持って己の魂を肉体に留め続ける生きた死体だ」
「――――！アンデッドと言うことですか？」
「おいミカエル、天界的にアンデッドは異端とは言えその殺気を押さえろ」
「……申し訳ありません」
北斗が屍と聞きミカエルが反応するがアザゼルに一睨みされ大人しく座り直す。
まあ確かに、死者が生き続けるなんて異端だわな。
「けど、それだけでコカビエルを倒せるのか？」
「倒せるさ。北斗は高い再生能力を持っているため、普段人間が押さえ込んでいる力を

百パーセントあるいはそれ以上の力を振るえる。何より理性でも知性でも本能でもなく未練と妄執そのもので動いている北斗は、本能以上に体の動かし方を知っているらしいからな」
「……らしい？」
「俺も詳しく知らない。北斗を俺に与えた奴が言ってた言葉だからな。彼奴に会うのは彼奴が接触してこなけりゃ無理だし」
「……」
　嘘は一つも付いていない。実際俺は北斗が未練と妄執そのものであることと奴曰く原初の体術を使える理由はさっぱり解らない。
「ちなみに、後ろの嬢ちゃん達はどんだけ強いんだ？」
「コロンビーヌが北斗より弱くて北斗は奈阿より弱い。最強はワルプルギスかな」
「伊月、我は？」
「そーだな、フィーも強いぞ」
「ん」
　頭を撫でると満足そうな気配を出した。北斗ほど表情が豊かではないがやはり似ているのでその辺は解る。
「俄には信じがたいな。コカビエルを無傷で倒すってだけで驚いてんのに、そいつより

強いのがさらに二人、か……さらに赤龍帝。お前はそんな戦力を集めて、何をするつもりだ？」

「……特に何も」

俺の言葉にその場の全員がポカンとし、ライザーだけはやれやれと肩をすくめる。

「そもそも俺は戦力として集めた訳じゃないしな。まだ俺も若かった頃、ある奴にハーレムが欲しいと言ったら渡された。ま、今では大切な家族だけど。イッセーに関してだって、赤龍帝関係なく友達だ……まっ、それじゃ納得できないみたいだけどな」

トップ陣営の顔を見る限り俺の発言なんて信用していない。当然だ、会ったばかりの相手を信用するようじゃ仮にもトップなんてやってられないだろう。

「なら同盟でも結ぼうか？此方の望みは天使、堕天使、悪魔の強制的な勧誘を無くしてもらうこと。悪いがしつこくて、何名か殺してる。行方不明扱いになっている者の内何人かはそういうたぐいだろうぜ」

「……悪びれないんだな」

「悪びれる必要がどこにある？襲ってきたのは向こうだ。相手がしつこかったんで殺してしまいましたで納得できるならいくらでも謝ってやるがな」

「……堕天使は同盟に賛成だ。元々悪魔や天使ともするつもりだった。戦争の大本は神と魔王、堕天使側はそもそも降りかかる火の粉を払う内に憎しみがたまって、だ

しな」
「……我等天使も同意見です。神も居なくなった今、争う理由はありませんからね」
「我等も同じだ。主を存続させるためには、我等も前に進まなくてはならない」
「また戦争すれば悪魔も滅んじゃうだろうしね☆」
「同盟を結ぶって事は破れば残り全てから狙われるって事だ。はなから敵対する気なんてないが、敵対した時手を組めるやつがいるってだけで安心するだろ？」
俺の言葉に無言の肯定を返す一同。と、その時だった。
――人間風情と同盟など、偽りとは言え魔王を語る者が愚かしい――
「ワルプルギス！コロンビーヌを守れ！」
「キャーハハハ！」
俺が叫ぶと同時にワルプルギスがコロンビーヌを魔力で覆う。コロンビーヌは人形、異能に対する抵抗を持たないがワルプルギスの魔力なら無効化出来るはず。
そして、時が止まった。

襲撃者倒しました！

時間が止まると同時に俺は周囲を確認する。動けるのは、各トップとゼノヴィア、銀髪、イッセーにライザー、そして俺達か。あ、グレモリーも動けてら。

「ライザー君も動けるのか」

「だてに鍛えていませんからね」

サーゼクスの言葉にライザーは誇らしげに言う。確かにな、未だコロンビーヌに勝てないが粘れる時間は日に日に増えている。

と、不意に外を見ればいつの間にかローブを着込んだ男女が現れ此方に向かって手を向けていた。その手に光がたまる。

「ううあああああ！」

「北斗、落ち着け。コロンビーヌ」

「はぁい」

北斗がとうとう経文を引きちぎり飛びだそうとしたが銀の鎖が現れ北斗を縛る。そして、コロンビーヌが窓からトン、と飛び降りた。

着地するとスカートの裾を持ち上げ一礼し微笑む。

「おい、あの娘一人で大丈夫なのか？」
「ん？何でだ？」
「何でって……」
　確かにコロンビーヌからは魔力を感じないだろう。光力も、神器の気配すらも。それはそうだ。コロンビーヌは人形なのだから。
「それより彼奴等は結界の内部に転移してきている。なら、繋がっている者がいるはず。そうだろ？」
「あ、ああ……」
「なら捕らえる。捕らえて尋問する。相手がどの程度の組織かも知りたいしな。殺さず無力化する点において、コロンビーヌの右にでる者は居ない」
　北斗も奈阿もワルプルギスも皆加減しても殺しかねないし。
　アザゼルは俺の言葉に窓の外を見て目を見開く。ローブを着込んだ男女が全員喉を押さえ倒れ込んでいた。
　目を見開きゼヒゼヒ荒い呼吸を繰り返すその姿は過呼吸にでもなったようだ。倒れた数を補うように現れた者達も皆直ぐに倒れる。
「……おい、何が起きてんだ？」
「あの銀色の煙が見えるか？」

尋ねてきたアザゼルに、俺は校庭に漂う銀の煙を指さす。それはコロンビーヌの周囲から発生していた。

「な、何だありゃ……」

「アポリオン。極小サイズの自動人形で、他人の体内に入りゾナハ病を発生させる。呼吸困難や全身の神経に走る激痛っー症状をな。ついでに、それが直接死に繋がることはないぜ。半永久的に呼吸が出来ず生き続けるわけだ。それがいやなら、後で何でも快く教えてくれるだろうさ」

「……アポリオン……アバドンかよ。まあ相応しい名前だな」

ついでに試した結果、これは人外にも効いた。最も魔力で体内を強化したり、元より高い魔力を持つ者には相当な量を入れなきゃ効きにくいが彼奴等は人間。問題ないだろう。

「で、さっきの声の主はどこだ？あの中には居ないみたいだけど、逃げたか？」

――逃げる？何故私が人間如きがやられただけで逃げなくてはならないのですか――

と、苛立ったような声が聞こえ魔法陣が床に浮かび上がる。

「旧レヴィアタンの紋章!?」

「なる程、そう来るわけか……今回の黒幕は！」

旧……レヴィアタンだあ？悪魔側のクーデターに巻き込まれたわけかよ。面倒だなぁ。

そして魔法陣から一人の女が現れた。

「はじめまして人間。私は真のレヴィアタンの血を引く者、カテレア・レヴィアタン。人間にしてはそこそこの力を持っているそうですね、我々に力を貸すという名誉を与えても良いですよ？」

「……ま、俺としては不干渉がちょうど良いんだが」

「ええ、新たな世界作った後、貴方如きに干渉している暇はありませんからその点は安心して良いかと」

「如きとは見下してくれるな。力がないから王位を奪われた悪魔如きが」

「……！」

ピクリとカテレアと言う悪魔の目元がひきつった。

「何より不干渉を望もうが彼奴が認めない。どのみち関わるように誘導してくる。ならはじめから同盟を組んでた方が良い。ただ、お前には感謝してるぞ？おかげで今後暫く悪魔との交渉は楽しそうだ」

「貴様……！人間風情が！」

「例えば、魔王の妹の眷属の救出とかな……」

ドガン！と旧校舎の一部を破壊して銀色の騎士達が気絶した女装少年を抱えて飛び出してきた。
「……な、なんです彼奴等は!?」
「銀の煙は小型の自動人形、集めてああいう風に扱える」
「――――！」
俺の言葉にカテレアが煙を操っていたコロンビーヌを睨む。視線に気づいたコロンビーヌはべぇ、と舌をつきだしカテレアが憤怒の形相で飛ぶ。
「この、クソガキガァァァァ！」
「知ってる？私のご馳走は、新鮮な血液なの。串刺しはお好き？」
そして突っ込んでいくカテレアの前に大量の銀色の棘が現れカテレアの身体を貫く。何が起きているのか理解できないと言った顔でゴボリと血を吐き絶命する。
コロンビーヌは流れ落ちてくる血を全身で浴び一部を舌で受け止める。

魔術師達は三大勢力が連れて行った。
悪魔からは旧魔王派が迷惑をかけた、その排除の礼も後日取りたいと言ってきた。報酬は戦力以外でお願いした。どうせ監視が来るだろうからな。

「でも何のつもりなのかしらねぇ？」
「何が？」
「ライザーの事よ、あの魔法使い達、黒幕はオーフィスと言っていたでしょ？」
「……？」
　コロンビーヌの言葉にオーフィスは首を傾げる。確かに、ライザーは黙っていてくれた。それを言われればまた面倒なことになっただろうな。
「ライザーにも何か思惑はあるんだろうさ。それはまた今度、来た時聞けばいいさ」

「お兄様、お腹を押さえながら本を読んでどうしたのです？」
「フェニックス家の再生能力も意味をなさない胃痛に効きそうな薬を探しているんだ」